

経営社会政策からナチズムへ

— F. シェッフエルの『硝子の驚異』と E. アッペー —

竹 岡 健 一

はじめに

本稿は、ナチス時代のドイツにおける通俗科学的著作に関する研究の一環として、フリッツ・シェッフエルの『硝子の驚異』（1938年）を取上げ、その主要登場人物であり、ドイツにおける経営社会政策の先駆者とみなされるエルンスト・アッペが、大東亜戦争（第二次世界大戦）中の日本での同作品の受容において、ナチス的な経営者・指導者とみなされたことを明らかにしようとするものである。その際、そうした受容の時代背景を把握する上で、1920年代から1930年代初頭にかけてのドイツにおける経営社会学の成立とナチス時代におけるその変質、およびナチスの経営社会政策の日本での受容についても詳しく論じる。また、日本での『硝子の驚異』の受容を論じる上では、当時の日本で軍需生産増強の一助として「科学技術文芸作品」が求められていたことに着目し、「生産文学」や「光学兵器」という観点での受容に焦点を当てる。以上の考察を踏まえた上で、最後に、シェッフエルの『硝子の驚異』という作品そのものにナチズム的な要素があるのかどうかを検討する。

なお、『硝子の驚異』のタイトルは、副題まで含めると『硝子の驚異 三人の男たちが工場を作る ツァイス、アッペ、ショット』であるが、本稿では、特に必要がない限り『硝子の驚異』を用いる。また、本稿において1945年以前の日本の著作物を引用する際、かなづかいと送りがなは原文どおりとするが、漢字は原則として新字体を用いる。

1. アッペの生涯とシェッフエルの『硝子の驚異』

1.1. アッペについて

始めに、本稿において中心的な対象となるアッペの生涯について概略を見ておきたい。¹⁾

* 本稿はJSPS 科学研究費補助金基盤研究（C）、課題番号23K00425、研究課題名「ナチス時代の通俗科学的著作における科学技術とナチズム」の一部である。助成に対し、衷心より感謝申し上げる。なお、本稿の内容の一部については、「かいろす」の会 2025年度研究発表会（2025年8月8日 於九州大学伊都キャンパス）において口頭発表を行った。

エルンスト・アッベ (Ernst Abbe, 1840-1905) は、1840年1月23日に、紡績工場の職長の長男としてアイゼナハで生れた。家庭は貧しかったが、1843年に創立された実業中等学校に進学して、校長の援助と自らの努力の結果、通常よりも1年早く卒業し、大学進学資格を得た。そして、父親が務める工場の所有者の金銭的な援助によって、1857年にイエナ大学に進学した。入学後3学期の間に多くのコンクールで研究が認められて奨学金を獲得し、数学と物理学の教授カール・スネル (Karl Snell, 1806-1886) の勧めにより、1859年の春にゲッティンゲン大学に移り、1861年3月に博士号を取得した。その後、大学教授資格を得て、1863年の冬学期から、イエナ大学で私講師として授業を行った。1870年5月には員外教授に任命され、1877年には天文学の教授および天文台長に任命された。

1863年11月、アッベは機器の委託のために、カール・ツァイス (Carl Zeiss, 1816-1888) が1846年に起こした光学機器製作所を訪れた。顕微鏡の製造には光学の法則の究明と応用が必要だと考えていたツァイスは、これを機にアッベに相談をもちかけ、1866年7月3日に共同作業の取り決めを行った。アッベは顕微鏡の品質向上に貢献し、顕微鏡設計の確固とした科学的基礎を創造した。とりわけ1870年の正弦条件の公式化は、ツァイス社とドイツの光学産業を世界の頂点へ推し進めた。

このようなアッベの業績に対し、ツァイスは企業の純益の分配を提案したが、アッベは科学者として自分の研究成果を公開することを求めた。そこで、ツァイスはアッベに共同経営者となることを提案し、アッベは計算の公開を諍め、1875年に匿名の社員となった。他方で、1878年、イエナ大学からの教授職の申し出を辞退し、常勤の名誉教授の職を引受けた。また、ツァイス社の共同経営者となり、その後1884年からはショット社の共同経営者ともなったことから、天文台長と大学教員としての報酬は受け取らなかった。この間、1871年には、恩師スネルの娘エリーゼ (Elise) と結婚した。

その後、アッベは、顕微鏡で像が結ばれる過程で生じる収差を取り除くことに努め、均質液浸の導入、アポクロマート対物レンズ、補正接眼レンズの開発など、顕微鏡の設計における先駆的な標準を開発し、1880年には、立体鏡的な効果をみせる双眼顕微鏡を生み出した。光の回析を重視するアッベの顕微鏡結像理論は、応用光学における最も基本的な発見の一つであり、ツァイス社の製品ラインの拡大と密接な結びつきを持つ多数の補助物、測定器機、カメラレンズ、望遠鏡の設計や製作もアッベに負っている。

1) アッベの生涯については、野藤忠『カールツァイスの経営倫理——エルンスト・アッベの経営思想——』ミネルヴァ書房、2012年、1-27、229-230ページ、浅井治海『ドイツ近代工業のバイオニアたち——技術と産業を創った人々——』フロンティア出版、2011年、90-95ページを参考にした。

1876年には、ツァイスの長男ローデリヒ（Roderich Zeiß, 1850-1919）も共同経営者となり、その後1891年にかけて、ツァイス社は売上高を10倍に伸ばし、1877年にはわずか36人であった従業員数も550人へと増加した。また、1882年には、前年から光学硝子の共同研究を行っていた硝子化学者のオットー・ショット（Otto Schott, 1851-1935）がイエナに居を移し、1883年までに700もの溶解試作物を産出した。そして、1884年、アッペ、ショット、カールとローデリヒ・ツァイス父子は、硝子技術研究所ショット・ウント・ゲノッセンを設立した。本研究所は、プロイセン政府による史上初の本格的な巨額の直接的な国家助成を受けた一大国家施策であり、世界史上初の本格的な近代的産業研究所であった。そこでは、新たな産業技術を代表する顕微鏡と、その材料の光学硝子、ついで温度計硝子、さらにさまざまな科学器具の材料である器具硝子等が相次いで開発された。

こうした新しい科学的機器の開発と並行して、アッペは社会改良家としても活動し、必要なのは慈善ではなくよりよい法的なものの制定であるとの考えに則り、従業員の社会的権利の確保のために尽力した。例えば、1875年には会社の健康保険基金を設立し、1887年には退職した従業員や家族のための年金基金を設立し、1890年には1日9時間労働制を導入した。

この間、1888年12月にカール・ツァイスが没し、ツァイス社の所有権と管理の再構築が必要となったのをきっかけに、ツァイス社とショット社の経済的成功を長期間にわたって継続することを目的として、アッペは財団設立を推し進めた。そして、イエナ大学の法律学教授エドゥアルト・ローゼンタール（Eduard Rosenthal, 1853-1926）の助言も得て、1889年5月19日付でカール・ツァイス財団を設立し、ワイマール内閣の承認により、法人の権利を与えられた。財団の定款によって、メンバー企業の将来は永続的な基礎の上に守られ、イエナ大学とイエナ市も、財団の非営利活動から恩恵を受けることになった。財団設立の2年後、アッペは、妻子が生活するためのわずかな補償金の受け取りを除いて、ツァイス社とショット社の持分すべてを財団に譲渡した。また、同年、ローデリヒも、多額の補償金を受け取るのと引き換えに退職したため、彼の持分も財団のものとなった。ショットも死亡時には持分を財団に譲渡することを誓約したが、それは1919年に実行され、それによってカール・ツァイス財団はツァイス社とショット社の唯一の所有者となった。

財団の定款は1896年に発行し、それによって、業績が不振であっても下げることのできない最低賃金、従業員への利潤分配、ドイツで初めての有給休暇などが導入された。また、1896年には、労働者集団によって選出される労働者委員会を設け、経営陣に対して意見や発議ができるようにした。1901年からは、1日8時間制を導入した。

財団は、イエナ大学に対しても、1886年から1905年までに総額200万マルクの寄付を行い、科学技術の発展に貢献した。また、1905年から1908年にかけて、大学本館の再建のために、必要な資金の半分に当たる125万マルクを寄付した。

ツァイス社の光学工場の従業員数は、1905年頃には2000人にまで増加したが、こうした企業の成長は、イエナ市の産業都市としての発展に貢献し、同市の人口も1890年から1905年までに倍増して2万6,360人となった。また、財団の資金援助により、1909年には市民プールが、1918年には小児病院が建設された。また、住宅組合ローンによる従業員の自宅建築の援助は、イエナ市の住宅開発にも貢献した。さらに、様々な企業がイエナに立地するようになった。その他にも、財団はイエナとその周辺地域に対して、託児所、結核療養所、公園等の建設・維持のための資金援助を行った。

こうして科学者、経営者、社会福祉家として多大な業績を成し遂げたアッペは、例えば、1896年にはイエナ大学法学部から名誉博士号を贈られ、1901年にはザクセン科学アカデミーの会員とゲッティンゲン科学アカデミーの名誉会員に推挙されるなど、さまざまな名誉を与えられた。しかし、不眠と頭痛による麻酔薬の過剰摂取で体調を崩し、1903年9月24日に職を退き、1905年1月14日に死去した。

1.2. 作者と作品の概要

『硝子の驚異』の著者フリッツ・シェッフエル (Fritz Scheffel) は、1889年7月6日にローダ (Roda, 今日のシュタットローダ [Stadtroda]) に生れ、ワイマールの教員養成所に通い、1910年からチューリンゲンのキーゼルバッハ (Kieselbach) で教師を務め、1923年からはゴータの教員養成所で働いた。²⁾ しかし、1933年に政治的な理由で解雇され、その後作家活動を行い、1942年2月19日にワイマールで死去した。著作には次のようなものがある。

- ・『パセリへの旅 およびその他の人形劇』(*Die Reise nach Petersilien und andere Kasperlstücke, mit Paul Kettel*, 1934)
- ・『波をくぐる者 ヴィルヘルム・パウアーがUボートを発明する ある人生の戦いの物語』(*Der Brandtaucher. Wilhelm Bauer erfindet das U-Boot. Die Geschichte eines Lebenskampfes*, 1936)
- ・『薬味の効いた言葉の袋』(*Der gepfefferte Spruch-Beutel*, 1937)

2) シェッフエルについては、チューリンゲン文芸協会のサイト (<https://www.thueringer-literaturrat.de/autorenlexikon/scheffel-fritz/>)、プロジェクト・ゲーテンベルクのサイト (<https://www.projekt-gutenberg.org/autoren/namen/scheffr.html>)、およびドイツ国立図書館のサイト (https://www.dnb.de/DE/Home/home_node.html) の書誌情報を参考にした。いずれも最終閲覧日は2025年4月21日。

- ・『ドイツ人が世界の庭を探す』 (*Deutsche suchen den Garten der Welt*, 1937)
- ・『スペインの煉獄 1809年から11年のスペイン独立戦争におけるドイツ人の運命』 (*Fegefeuer Spanien – deutsche Schicksale in Spaniens Freiheitskampf 1809-11*, 1938)
- ・『バロック時代の女性 ドイツのバロックが遺した愛の学校, 女性事典, モリタート集, およびその他の同時代の作品からの独断的だが本物の名文集』 (*Vom barocken Frauenzimmer. Eine Auslese eigenwillig und echt, aus Liebesakademien, Frauenzimmerlexiken, Moritaten-Sammlungen und anderen zeitgenössischen Werken, die der deutsche Barock hinterließ*, 1938)
- ・『硝子の驚異 三人の男たちが工場を作る ツァイス, アッペ, ショット』 (*Gläserne Wunder : Drei Männer schaffen ein Werk. Zeiß Abbe Schott*, 1938)
- ・『パンと塩 立坑と耕地の間の人間 ある経済小説』 (*Brot und Salz. Menschen zwischen Schacht und Scholle. Ein Wirtschaftsroman*, 1939)

なお、ナチス時代に政治的な理由により高校教師を辞めさせられたとされる一方で、Uボートの開発を描いた『波をくぐる者』のような著作からは、保守的・愛国主義的な一面も窺われる。また、『ドイツ人が世界の庭を探す』が帝国著作院の1937年の推薦図書とされたことや³⁾ 1939年に『公共図書館のための帝国部署の雑誌』 (*Zeitschrift der Reichsstelle für das Volksbüchereiwesen*) において、シェッフェルの本の調達が図書館員に勧められたことから⁴⁾ 少なくとも作家としてのシェッフェルとナチスとの関係は必ずしも陰悪なものではなかったものと推察される。

ところで、『硝子の驚異』は全体で329ページから成り、数字で区切られた33の章に分かれている。内容的には、第25章の終わりでツァイスが死去するまでと、第32章の終わりでアッペが死去するまでに大きく分けられる。また、第33章は、「完結編」 (*Vollendung*) として、それまでの章とは区別されている。

このうち第1章から第25章では、おおむね1830年代後半から1886年までの出来事を取り上げられ、ツァイスがイエナで光学工場を起こした経緯、光学器械の製造が職人の個人的技量 (試作) に左右されていること、大学の機器の製造を通じたツァイスとアッペとの出会い、アッペによる科学的な公式に基づく顕微鏡製作の進展、ツァイス社の経営へのアッペの匿名での参加、ショットとアッペの出会い

3) Vgl. Fritz Scheffel: *Gläserne Wunder : Drei Männer schaffen ein Werk. Zeiß Abbe Schott*. Verlag Braun & Schneider. München 1938, Anzeigenseiten.

4) Vgl. Hans-Werner Niemann: *Das Bild des industriellen Unternehmers in deutschen Romanen der Jahre 1890 bis 1945*. Mit einem Geleitwort von Wilhelm Treue. Colloquium Verlag, Berlin 1982, S. 292.

い、ショットによる光学用の新式硝子の発明、硝子工場開設のためのプロシャ政府への建白書の提出、予算の裁可による硝子研究所の操業開始、硝子の新紀元を示す顕微鏡の完成、ツァイスの死去などが語られる。

一方、第26章から第32章では、1887年から1905年にかけての出来事が取り上げられ、アッペによる資本主義ともマルクス主義とも異なる第三の道の模索、アッペの遺産の法人への遺贈の計画、カール・ツァイス財団の設立、カールの息子ローデリヒの退社、財団の定款の作成、労働者階級の利益をはかる施設や対策の検討、定款の公表、ドイツ機械学・光学協会での労働条件改善の提案、健康状態を考慮したアッペの引退と死去などが語られる。

そして第33章では、1914年から1938年頃までの出来事が取り上げられ、アッペ没後の工場の状況、第一次世界大戦中に工場が兵器工場として銃後の戦線となったこと、戦後の大沈静期における定款の効果、ショットによるショット商会の営業持分の財団への譲渡、ショットの死去、ナチス時代に工場が再び武器工場となることなどが語られた後、アッペの社会主義と犠牲の尊さが称えられる。

本作品は、副題の通り、ツァイス、アッペ、ショットの3人を取り上げており、物語はツァイスの起業から始まって、これにアッペが加わり、次いでショットが加わるという形で進む。だが、いずれの部分でも主な役割を担っているのはアッペであり、特に第26章以降は、ほとんど財団設立や労働条件の改善のために奮闘するアッペの物語といっても過言ではない。こうした特徴は、本作品と1920年代から30年代にかけてのドイツにおける経営社会学的な議論とのかわりを強く示唆している。

2. 経営社会学的観点からのアッペの評価

2.1. 経営社会学の成立

ドイツにおいて「経営社会学」(Betriebssoziologie)という学問分野が成立したのは1920年代から1930年代初めにかけてであるが、その際特に大きな役割を果たした人物として、ゲッツ・ブリーフス (Götz Briefs, 1889-1974)、カール・クリスティアン・タールハイム (Karl Christian Thalheim, 1900-1993)、およびルートヴィヒ・H・アードルフ・ゲック (Ludwig H. Adolph Geck, 1876-1969) をあげることができよう。⁵⁾ 1927年に初めて「経営社会学」という言葉を用いたブリーフスは、1928年に「ベルリン工科大学経営社会学・社会的経営理論研究所」(Institute für Betriebssoziologie und soziale Betriebslehre der technischen Hochschule zu Berlin) を設立した。経営社会学研究の拠点となった同研究所の主催により、1930年2月には、「社会的経営政策の諸問題」(*Probleme der sozialen Betriebspolitik*) というテーマで、技術的合理化を人間にふさわしいものとするための研究集會が開催さ

れ、ブリーフスの編集により講演集として公刊されている。ブリーフスはまた、1934年に、経営社会学の金字塔ともいふべき『産業における経営管理と経営生活産業に於ける現代的大企業の社会学と社会心理学について』(*Betriebsführung und Betriebsleben in der Industrie. Zur Soziologie und Sozialpsychologie des modernen Großbetriebs in der Industrie*)を世に問うた。一方、ライプツィヒの「中部ドイツ移民相談所」(*Mitteldeutsche Auswanderungsberatungsstelle*)などに努めており、1928年にはライプツィヒ商業大学で大学教授資格を取得したタールハイムは、⁶⁾1929年に、著書『アッベとラーテナウとフォードの社会批判と社会改良』(*Sozialkritik und Sozialreform bei Abbe, Rathenau und Ford*)を出版し、ヴァルター・ラーテナウ(Walther Rathenau, 1867-1922)とヘンリー・フォード(Henry Ford, 1863-1947)と対比しながら、アッベの経営思想や経営政策の研究と理解に有益な視点を与えた。そしてゲックは、ブリーフスによってベルリン工科大学の研究所に招聘されて、経営社会学の研究に従事し、経営社会政策の体系化を試みた。1934年の著書『時代とともに変わる社会的労働条件 経営社会学への歴史的導入』(*Die sozialen Arbeitsverhältnisse im Wandel der Zeit. Eine geschichtliche Einführung in die Betriebssoziologie*)は、豊富な歴史的研究として知られている。

このような経営社会学において最も問題視されたのは、手工業経営から工場経営へと生産形態が変化していく過程で生じてきた労働者の人間疎外、すなわち、企業者に隷属することに起因する人間性の疎外であった。というのも、この従属的労働関係が、分業労働とあいまってプロレタリア意識を発生させ、労働者に社会の共同的成員としての自覚を見失わせるとともに、職業労働の意味の喪失をもたらすからである。したがって、経営社会学の最も重要な課題は、資本主義経済において人間性を疎外された労働者の人間性を回復することであり、その意味でまた、経営社会学の最大の特色は、経済と経営における人間的諸要素を重視し、経営生活と労働者の生活態度を結びつけて理解する点にあった。そして、こうした問題の解決策を、経営者と労働者が心情的に結びつき、有機的に結合する経営

5) 経営社会学の成立については、次の文献を参考にした。石坂巖『経営社会政策論の成立——巨大経営組織と機械化労働の問題——』有斐閣、1968年、i, iii, 124, 127-129, 132, 134-135, 138-140, 148-150, 152, 163-166, 174, 183, 187-188, 190ページ；野藤忠、前掲書、176-178, 192, 194, 196-197；塚本成美「経営社会学的思考の生成——経営社会学の基層(1)」(『城西経済学誌』第30号、2003年、1-19ページ)、2ページ；塚本成美「労働社会問題と経営——経営社会学の基層(2)」(『城西経済学誌』第31号、2004年、35-60ページ)、54-56ページ；塚本成美「ドイツ経営社会学の成立と理論特性」(『城西大学経営紀要』第16号、2020年、27-87ページ)、27, 33, 36, 58, 59, 62-63, 69-70, 77-78, 80ページ；小野清美「『科学的経営管理』運動とナチズム：DINTAからドイツ労働戦線へ」(『阪大法学』第59巻、3・4号、2009年、5-65ページ)、22, 23ページ。

6) タールハイムの経歴については、前掲のドイツ国立図書館のサイトの書誌情報を参考にした。

共同体（Betriebsgemeinschaft）の形成に求め、その任務を背負うのは経営者であるとした。

このように経営者が主体的に経営社会政策を推進するべきだとする経営社会学の考え方は、それまでに国家によって行われてきた労働者保護や労働環境の一般的・形式的な改善とは大きく異なる。確かに、すでにドイツ帝国期に、労働者保護のために多くの立法措置が実現された。例えば、雇主賠償責任法、疾病保険法、傷病・老齢保険法、日曜日の休業と賃金の保証、児童労働保護などである。しかし、そのような国家社会政策は、労働者問題の人間的・社会的側面、つまり労働者の精神態度の問題に接近しえないばかりでなく、社会改革の主導権を企業経営者から奪うものであった。そのため、資本主義が高度化するにつれて、国家とは別に、経営が自ら労働者の人格的価値や人間的な個人要求に配慮し、労使間の共同感情・共同労働を形成するべきだという考え方が生じ、その結果、企業家が自発的に、労働時間の短縮、利潤分配制、労働者委員会、職場住宅、工場従業員の厚生施設といった経営社会政策を講じることが増加した。

むしろ、逆に見れば、その形式性と一般性にこそ国家社会政策の存在意義があるわけだが、だからこそ、そうした国家社会政策の限界の認識に経営社会学の出発点があるのであり、その意味で、経営社会政策は、経営社会問題の予防・解決によって国家社会政策を補完するものである。また、経営社会学の意味での経営社会政策は、恩恵的な福利方策とも異なる。というのも、福利方策の背後にはしばしば、保護と恩恵の代償として恭順と忠誠を、規律と従属を要求するという、従業員に対する支配的な動機が潜むからである。それに対し、経営社会学は、経営社会問題の解決を、法的・社会的地位の上昇による労働者の自立に求めるものである。さらに、経営と対峙する激しいストライキなどを経営雰囲気にも根を遣すものとして退けるという意味で、経営社会学の意味での経営社会政策は、社会主義的な労働組合運動とも異なる。他方で、経営者に経営社会政策の自主的な推進を説く点で、倫理的な性格を色濃く持つ。

2.2. アップに対する評価

このような経営社会学が形成された時期は、タールハイムの著書のタイトルにも見られるように、経営者としてのアップの業績が評価された時期でもあった。⁷⁾ というのも、形成期の経営社会学者らにとって、ツァイス社において経営社会政策を実践したアップはまさに、経営社会政策が現実の経営において実践の可能性をもつことの歴史的証明に他ならなかったからである。

例えばタールハイムは、すでにあげた著書『アップとラーテナウとフォードの社会批判と社会改良』において、社会的責任を自覚し、社会倫理的な動機から経

営社会政策を行った経営者としてアッペを高く評価する。市民性を失った無産労働者というものがそもそも資本主義制度下の企業を基盤にして生じてくることから、アッペは、企業内における労働者の市民化に努め、労働者を企業経営の共同構成員とし、労働者の間に経営に結びつく生き生きした志向を形成することを自らの使命とし、企業における労働者の権利を向上させて法的に確立することによってそれを実現しようとした。具体的には、労働条件が不十分であること、無産労働者の生活が不確実な状況にあること、経営管理に労働者の影響力がまったくないことなどについて改善を図ることである。こうしたアッペの経営社会政策は、経済の中央管理化や権力の中央集中化によって個人の人間の自由が奪われるソ連方式や、功利主義や初期資本主義時代の自由主義を基調とするアメリカ方式とは異なり、社会の有機的組織の編成を理念とするドイツ的な方式として模範的な事例であった。

2.3. 『硝子の驚異』の参考文献

ところで、シェッフェルの『硝子の驚異』が、このような経営者としてのアッペに対する評価に基づいていることは、巻末に掲げられた参考文献からも窺われる。⁸⁾ 本書の参考文献は、年代別に見た場合、年代が不明な4件と、すべての年代にわたる新聞を除き、1900年代が3件、1910年代が1件、1920年代が4件、1930年代が9件である。また、文献の具体的な内容を見ると、アッペの論文集、アッペの伝記、カール・ツァイス財団の紹介とその意義、アッペと現代のかかわりに関する論稿、民族共同体への指導者としてのアッペ、アッペ没後25周年と30周年の追悼文、ショットへの追悼文、ツァイス工場設立に関する資料、ツァイス工場史、ツァイス工場における経営社会政策、イェナ硝子に関する科学技術的論稿、ツァイス工場内新聞などである。これらのうち、少なくとも次の3件には、経営社会学的な視点が含まれているものと思われる。

- ・H・ヴァイネル『カール・ツァイス財団の意義 エルンスト・アッペの社会政策的思想（1925年）（H. Weinel: *Der Sinn der Carl-Zeiß-Stiftung, Ernst Abbes Sozialpolitische Gedanken.*）

7) 経営社会学的観点から見たアッペの評価については、次の文献を参考にした。石坂巖、前掲書、125-129、132、134-135、148-150、156-159、187-189、193-194ページ；野藤忠、前掲書、i-iv、vii、viii、131、145-146、163-164、167、172-173、175、177、189、191-192、195-197、203、205、218、220-222、227ページ；塚本成美「経営社会学的思考の生成——経営社会学の基層（1）」、9、15ページ；塚本成美「労働社会問題と経営——経営社会学の基層（2）」、52-56ページ；塚本成美「ドイツ経営社会学の成立と理論特性」、43-44、70ページ。

8) Vgl. Fritz Scheffel: A. a. O., S. 331f.

- ・フリードリヒ・ショーメルス『イエナのツァイス工場の社会的諸制度の発展』(1925年) (Friedrich Schomerus: *Die Entwicklung der sozialen Einrichtungen des Jenaer Zeißwerkes.*)
- ・フリードリヒ・ショーメルス『イエナのツァイス工場の経営政策 特にイエナのカール・ツァイス財団を考慮して』(1930年) (Friedrich Schomerus: *Die soziale Betriebspolitik der Jener Zeißwerke mit besonderer Berücksichtigung der Carl-Zeiß-Stiftung zu Jena.*)

2.4. もう一つの文学作品

また、アッペの経営社会政策的な取り組みは、経営社会学成立期に著わされた他の文学作品にも取り入れられている。それは、1928年に刊行されたパウル・フォン・シェーンアイヒ (Paul von Schoenaich, 1866-1954) の小説『アウグスト・シュミットの鞭 フォードとレーニンの間 残念ながら一部しか真実でない物語』(*Die Peitsche des August Schmidt. Zwischen Ford und Lenin. Eine leider nur zum Teil wahre Geschichte*) である。⁹⁾

1920年代のインフレ後のドイツを舞台とするこの物語において、ベルリンの機械工業の経営者らの多くは愛国主義的・ファシズム的なメンタリティーを持ち、ワイマル共和国を敵視し、経営協議会法に反対している。そのようななかで、アウグスト・シュミットは共和国支持者であり、ワイマル共和制を守るために結成された国旗団 (Reichsbanner) に加入している。そして、企業家たちの多くの反動的な試みとは逆に、カール・ツァイス財団をモデルとした改革を実戦する。例えば、信頼感と自意識を持つ労働者はよりよく働くと思じる彼は、経営協議会法の空洞化を残念に思い、労働者を企業の経営に積極的に関与させる。また、労働者と職員の給与が経営者やより地位の高い職員の給与と不釣り合いにならないよう、経済民主主義の実現を目指し、新しい規則を制定して、彼自身と職員も未熟練工の10倍以上の賃金を得ないようにする。資本の利子も、予備基金の支払いの後、労働者の間で配分される。

さらに、シュミットは、カール・ツァイス財団に倣って財団を設立し、それをベルリン大学の代表者から成る事務局、ドイツ労働組合総同盟、および工場管理部の手に委ねる。財団規約の基本的な規定は、財団の労働者は他の労働者よりも常に10パーセント高い給与を支払われねばならないというものである。加えて、社会的施設と予備基金の潤沢な支払いも予定されており、労働者のために様々なタイプの住宅も提供される。雇用に際しては、財団は、ブラックリストに載って

9) Vgl. Hans-Werner Niemann: A. a. O., S. 176-182.

いる労働者を優遇する。

こうしたシュミットの施策は、「資本主義とボルシェヴィズムの間の〈第三の道〉」¹⁰⁾とみなされているが、それは丁度タールハイムに関連して触れた、社会の有機的組織の編成を理念とするドイツ的な方式と一致するものであると言えよう。

3. 経営社会政策とナチズム

3.1. 経営社会学の変質

ところが、こうして1920年代から1930年代初めにかけて形成された経営社会学は、ナチス政権下において、1934年のブリーフスの亡命や1936年のベルリン工科大学経営社会学・社会的経営理論研究所の閉鎖により、断絶の時代を迎える。¹¹⁾すでに述べたように、経営社会政策の意義は、国家社会政策と適切な距離をとりながら、経営者が自発的・自立的に社会政策的課題を担うことにあり、その意味で、必要ならば国家に対して抵抗する姿勢を表明するものでなければならない。だが、国家的な利益の促進を最優先して経済生活を統制し、民主的多数決議を排除して、絶対的な権限を持つ経営指導者による指導を要請するナチス体制下で、そうした経営社会政策のリベラルかつ倫理的な発展傾向は許容されえなかった。人種主義的な「福祉国家」であるナチス国家による福祉事業は、「生産的」かつ忠実な「民族同胞」だけが受給しうるものへと変質したのである。

しかし、断絶とはいっても、経営社会政策とナチズムの関係はそれほど単純に区別しうるものではない。そのことは、ブリーフスが、『産業における経営管理と経営生活』の最終部分において、マルクス主義排除の文脈で——真意は不明だが——「総統」(Führer)と「臣民」(Gefolgschaft)という概念を経営に転用することを評価し、「国民社会主義経営細胞組織」(NSBO: Nationalsozialistische Betriebszellenorganisation)や「ドイツ労働戦線」(Deutsche Arbeitsfront=DAF)を信頼に値するとしていることから明らかである。また、ナチス統制下において実施された労働政策や雇用対策、労務配置、さらにはナチスの言う意味での「労働共同体」の形成も、経営社会政策の発展という観点から無視しえない。というのも、そこには、それ以前の経営社会政策と共通する部分が見られるからである。とい

10) Ebenda, S. 182.

11) ナチス時代の経営社会学については、次の文献を参考にした。石坂巖、前掲書、161, 169, 177, 178ページ；塚本成美「経営社会学的思考の生成——経営社会学の基層(1)」, 2-3ページ；塚本成美「ドイツ経営社会学の成立と理論特性」, 42, 64-67, 71, 84ページ；柳澤治「ナチス期ドイツにおける資本主義の組織化」(『西洋史学』第239巻, 2010年, 1-21ページ), 3-5, 7, 11ページ；川瀬泰史「『ナチス近代論争』」(『立教経済学研究』第50巻・第4号, 1997年, 39-61ページ), 50-51ページ；小野清美、前掲論文、27ページ；Verena Meier: *Wirtschaft und Arbeit im Nationalsozialismus*. Landesarchiv Sachsen-Anhalt, Magdeburg 2021, S. 66.

うよりもむしろ、ナチス政権は、ワイマール共和国時代になされた経営社会政策的な議論の成果を、自らの目的にあわせて積極的に応用したと考えるべきであろう。

3.2. 「ドイツ技能労働訓練研究所」とカール・アルンホルト

そして、その意味で、まさにワイマール共和国時代の経営社会政策とナチス体制下におけるそれとの連続性を最もよく示すのは、1925年に設立され、ワイマール共和国時代の産業合理化運動の一翼を担った「ドイツ技能労働訓練研究所」(Deutsches Institut für technische Arbeitsschulung = DINTA) と、その長を務めたカール・アルンホルト (Carl Arnhold, 1884-1970) である。¹²⁾ 同研究所は、1933年7月に「ドイツ労働戦線」に編入され、「ナチス技能労働研究・訓練所」と名乗り、その後、1935年10月に労働戦線の「職業教育・経営管理局」(Amt für Berufserziehung und Betriebsführung=AfBB) のなかに正式に編入されたが、アルンホルトは引き続き同管理局の局長を務め、ナチスの職業教育・訓練の第一人者として活躍したのである。

ドイツ技能労働訓練研究所の活動が経営社会学的な意味での経営社会政策と共通していることは、すでにその綱領に端的に表われている。というのも、そこでは、「経営の人間管理」(職場環境の整備・事故防止や経営管理者の育成、家族福祉にまでいたる広範囲な経営社会政策・余暇政策を含み、経営管理者・従者・工場の全般にかかわる)と、「有機的経営指導・経済指導」(科学的労働研究、心理学的・教育学的諸措置の研究と試行、労働空間の形成、光・照明・騒音と埃の対策、休憩室など職場環境全般の整備・美化)という形で、経営における労働者の人間性と有機的組織編成が重視されているからである。

だが、同研究所がナチス体制に組み込まれるにしたがい、感情、魂、情緒といった「非合理的なもの」や、戦士的特性、手工業的特性、思索的特性といった「民族的特性」がことさら強調されるようになる。また、労働者を内面的にも獲得するために、労働者が「労働の目的と意味」を認識できるよう配慮がなされたが、労働の意味と目的は、究極的にはナチス的な労働観・世界観によって与えられた。そうした意味で、人間要素を中心に据え、「指導者」「従者」からなる「有機的な」経営——それは「ドイツの合理化」とも呼ばれた——は、人間の非合理的な側面

12) 「ドイツ技能労働訓練研究所」とカール・アルンホルトのかかわりについては、次の文献を参考にした。小野清美、前掲論文、6、24-25、27、31-34、50ページ；川瀬泰史「ナチスの『近代性』——『修正主義派』のナチス近代化論の検討」(『立教経済学研究』第47巻・第1号、1993年、71-89ページ)、85ページ；川瀬泰史「『ナチス近代論争』」、50-52ページ；佐々木英一「ナチス期における職業教育・訓練の研究」(『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第45巻、1994年、205-231ページ)、214ページ。

とドイツ人労働者の民族的特質なるものに基づいて、労働の目的の内在化を、すなわち労働への意味付与によって労働者の精神的・内面的動員を可能にし、業績共同体としての経営共同体・国民共同体の構築を目指すものとなったのである。

3.3. アルンホルトのナショナリズム

ところで、こうしてドイツにおける職業教育・訓練を指揮したアルンホルトの著作には、ワイマール共和国時代からナチス時代への時代の変化の中で、「北方人種」、「人種の素質」、「血の力」といった人種主義的語彙の使用や、ナチズムの政治的思想を直接経営の中に根づかせるべく「闘争への喜び」への教育という目標を掲げるなどの質的な変化が指摘されている。¹³⁾ だが、果たしてそれが本当に変化といえるのかどうかについては、検討の余地があると思われる。というのも、アルンホルトは、ブリーフスによってベルリン工科大学経営社会学・社会的経営理論研究所で1930年2月に開催された「社会的経営政策の諸問題」の研究集会に講演者として招かれ、「ドイツ技能労働訓練研究所の意味における産業指導」(*Industrielle Führerschaft im Sinne des Deutschen Instituts für technische Arbeitsschulung (DINTA)*)という講演を行っているが、すでにそこにかなりナショナリスティックな要素が含まれているからである。

例えば、「たとえ本来の戦争はとっくに終わっているとしても、ドイツにいる我々は今日もお塹壕(Schützengraben)のなかに生きているのだ」¹⁴⁾と考える彼は、産業指導を検討するにあたって軍隊の指導者を模範とする。

最も意味深い指導者の心得は、かつての陸軍の「陣中要務令」(Felddienstordnung)の手引きに見られる。これを検討するとき、そこには、数十年来の最も気高い指導者性(Führertum)の経験が簡潔な言葉で表現されていると感じられる。理にかなった修正をすれば、そこでは次のように言われているのである。

1. 教育者であり指導者であることは、知識と経験の点で優れていることと、倫理的な真面目さと性格の強さを要求する。指導者は、責任を前にひるむことなく、いかなる状況においても、全人格を投入すべきである。
2. 指導者の個人的な態度は、従者らに対して決定的な影響力を持つ。
3. 部下の幸せのための決して休むことのない心遣いは、指導者の立派な

13) 小野清美、前掲論文、27ページ参照。

14) C. Arnhold: *Industrielle Führerschaft im Sinne des Deutschen Instituts für technische Arbeitsschulung (DINTA)*. In: *Probleme der sozialen Betriebspolitik*. Hg. von Goetz Briefs. Verlag von Julius Springer. Berlin 1930, S. 11-17, hier S. 16.

やりがいのある特権である。

4. すべての指導者は、手段の選択における失敗よりも、不履行と怠惰のほうが自らを苦しめることを意識せねばならない。

我々の科学者にとって、とりわけ社会学者と心理学者にとって、あるいはまた我々の哲学者にとって、我々の経済のために同じような「陣中要務令」を整えるよう試みることは、間違いなくやりがいのある課題であろう。¹⁵⁾

また、彼は、経済の現状について次のように言う。

我々の経済においても、今日、物事を新たに形作ろうとする力が戦っている。その関の声（Feldgeschrei）は、「ここに社会主義＝共産主義、ここに資本主義的経済秩序、ここにファシズム」である。だれが勝者にとどまるか、今はまだ予測できない。しかし、確かなことは、最も気高い犠牲の意思、最も純粋な理念、そして最も強い指導者性（Führertum）をもつグループが勝利するであろうということだ。¹⁶⁾

そして、彼は、講演を次のように結ぶ。

エンジニアよ、規模の大小にかかわらず経営指導者よ、前線（Front）に立て！ たとえこの叫びが我々の困窮した時代のなかで聞かれることなく消えてしまおうとも——人類の進歩を条件づけるのは、大衆ではなく指導者的な人格の持ち主（Führerpersönlichkeiten）なのだ！ 技術と経済がますます民族性と文化と国家の中心となる来るべき偉大な時代が、我々の隊列に、空想家や意気地なしではなく、指導者的な人格の持ち主を見出すべく配慮せん。¹⁷⁾

このように、アルンホルトの講演は、しばしば用いられる軍隊的な語彙や「指導者性」の重視といった点で、彼自身の信条がもともとファシズムに近いものであったことを窺わせる。ナチス時代に入り、ブリーフスが亡命を余儀なくされたのとは逆に、アルンホルトが1933年5月1日にナチスに入党していることも、それを裏書きしていると言えよう。と同時に、「社会的経営政策の諸問題」の研究集会にこのような講演が含まれていたことも、ワイマール共和国時代とナチス体制下での経営社会政策が決して容易に区別されえないことの一つの証左とみなされ

15) Ebenda, S. 14.

16) Ebenda, S. 17.

17) Ebenda.

よう。

3.4. 同時代の日本におけるアルンホルト紹介

ところで、大変興味深いことに、アルンホルトのものと見受けられ著作が、第二次世界大戦中の日本で翻訳紹介されている。それは、1942年に出版された黒田独逸研究所訳の『独逸産業経営の理念と組織』である。詳しい出典は記されていないが、原題は *Idee und Organisation der deutschen Industrieunternehmen* とされている。ここで、著者の信条を窺わせる箇所を引用したい。

人間はその精神力を以て数学の法則に従ふのではなく、より高級な血と種族の法則に従ふのである。¹⁸⁾

かかる発展のすべては今日ナチスの綱領を見れば明らかに知られるばかりでなく、吾々はその必然性をも認めるものである。¹⁹⁾

ドイツ国組織指導者ロベルト・レイ博士はかつてこの問題を次のやうに概括された。「吾々は経営において機械のタクトを血のリズムに融合させることに成功しなければならぬ。」²⁰⁾

経営においては人間に対する処理以上のものが問題なのである。果すべき課題は社会的といふよりも国家的な、すなわち兵士的な指導のそれである。²¹⁾

今日ナチスの経営に脈打つものは種々の力であり、これら力の作用は様々である。²²⁾

先ず「汝は無にして、汝の民族こそはすべてなり」といふナチスの政治的理念は、吾々の経営における労働に対してもまた、狭小な自我や狭隘な経営の壁を超越するところの理念を付与するのである。この労働理念の下にはじめ、「連帯」は「経営同志」となり、「利益集団」から「給付共同体」が成立

18) カール・アルンホルト『独逸産業経営の理念と組織』黒田独逸研究所訳、国本社、1942年、2ページ。

19) 同書、3ページ。

20) 同書、5ページ。

21) 同書、7ページ。

22) 同書、8ページ。

つことが出来るのである。合理的なものの彼方に横はる高き目標のための闘争のみが、ドイツ的心情に総合力を喚起することが出来るのである。²³⁾

ナチスの労働理念は導き^{ママ}との星として全労働の上に掲げられなければならない。〔中略〕しかしこの理念は常に経営共同体のうちにその正しい実現を求むべきであり、その最高の形態は「国民社会主義的模範経営」として現れ、各個々の経営所屬員にとって生きたものとなるであらう。²⁴⁾

かつての時代には超経営的諸力が創造的な人のうちに凡ゆる利己の力を喚起し、人々のうちに或る程度の「卑陋漢」を養つたのであるが、国家的経営においては「我等的思考」を前に押立て、人々のうちの「卑陋漢」を抑止することをすべての指導力が努めなければならない。²⁵⁾

このやうにして経営共同体は日々新しく形成され、強固にされるのである。しかし結晶化の過程において給付の楔といふ象徴を生じ、その楔の光つた強い力は指導者を示しその衝撃力は追従者をなすのである。両者の強固な結合のうちに力の活動の可能性が存するのである。経営指導者と追従者とから成るナチス経営共同体のこのような生活形態が完全に実現されてゐる経営には、一九三六年八月二十九日の総統令により、「国家的模範経営」といふ名称を与えることが出来る。²⁶⁾

現下の戦争もまたその一例である。確かに吾々は世界最優強の兵士を有し、疑もなく優秀な武器を使用し、天才的指導者の下に率ゐられてゐるのである。しかしこれだけでは全世界を揺り動かすには足らなかつたであらう。しかも吾々がそれを為し得るのは、ナチスの理念によつて支持され、これが創説者によつて全民族の眼に見えるやうに示された民族共同体の力の故なのである。²⁷⁾

このように、アルンホルトのもとでは、理想的な経営のあり方のなかにナチス的な人種理論や指導者原理、全体主義、戦争肯定などが持ち込まれており、ドイツ労働戦線の総裁を務めたローベルト・ライ (Robert Ley, 1890-1945) の言葉の引

23) 同書、12ページ。

24) 同書、13ページ。

25) 同書、15ページ。

26) 同書、18-19ページ

27) 同書、20ページ。

用や総統令への言及を含めて、ナチス体制への順応を見て取ることができる。

4. 日本でのナチスの経営社会政策の紹介

ところで、このようなアルンホルトの著作が同時代の日本で翻訳紹介された意図は、これを経営の模範とすべきということであったに違いない。というのも、戦時中の日本においても、軍備や軍需物資の生産性を高める上で、経営社会政策的な方法を応用することが急務とされていたからである。実際、まさにその意味で、当時の日本では、他にもナチス体制下のドイツにおける経営社会政策的な議論や施策が紹介されていた。ここで、1941年から1943年にかけての事例を5つ見てみたい。

a) カール・ブレットシュナイダー「工場独自の人間管理の諸方策」

本論考は、『鋼と鉄』(*Stahl und Eisen*)の1941年第8号に掲載された、カール・ブレットシュナイダー(Karl Bretschneider)の「ドイツ鉄鋼連盟経営経済委員会」での報告を翻訳したものである。主な内容は、「経営に於ける人間管理」を積極的に推進し、「給付共同体」の意味での「工場共同体」²⁸⁾を建設する上で特に有効な新しい方策の紹介である。具体的には、「ドルトムント＝ヘルデ製鉄会社」における「戦争便り」、「給付証明書」、「給付手帳」という3つの試みが詳しく論じられているが、経営社会政策という観点で特に興味深いのは後の2つである。

まず「給付証明書」(*Leistungsbescheinigung*)であるが、これは一年間工場に勤務し、その「給付と振舞ひ」²⁹⁾が標準的なレベルに達している従業員に対して交付される。この場合、「給付」という言葉は「業績」と同義と考えてよいであろう。証明書には、次のような文章が記載されており、責任ある経営者が日付と署名をしたうえで、「工場経営のために」³⁰⁾と記す。

『ドルトムント製鉄所（又はヘルデ製鉄所）』……工場所属の…氏は勤勉にして義務に誠実なる我工場の従業員として諸要請に合致する…依つて給付証明書を交付して証明する所以である。証明書は撤回されるまでその効力を有する。³¹⁾

28) カール・ブレットシュナイダー「工場独自の人間管理の諸方策」原田文一訳（『鉄鋼統制』第一巻・第七号、1941年、27-33ページ）、27ページ。

29) 同論考、32ページ。

30) 同上。

31) 同上。

さらに、「給付証明書」には、この文章に続いて、「これによつて特別な条件を充した場合給付手帳を得ることのできる一人となる」³²⁾と記されている。つまり、「特別な平均以上の経営給付」³³⁾をなした従業員には、「名誉ある認知と表彰」³⁴⁾として、「給付手帳」(Leistungsbuch)が発行されるのである。その「平均以上の特別の給付」には9つの項目が該当するが、例えば「設備（若くは作業）改善の提案」,「労働給付の平均超過の質」,「特別な労働集中」,「融通性と他方面的使用可能性」,「模範的集団共同作業」³⁵⁾などである。そして、これらの項目のどれか1つだけでなく、時の経過とともに複数の項目が達成される「給付の重複」,すなわち「給付結合」³⁶⁾に、特に大きな価値が置かれている。また、「給付手帳」を受けするには、単に特別な給付を行うだけでは不十分であり、当該の従業員が「人格者」であることを「日頃の作業場内の振舞ひによって実証」³⁷⁾することが求められる。

b) 独逸労働戦線労働科学研究所編『独逸の模範工場』

本書は、ドイツ労働戦線労働科学研究所によって編集された、「ナチス模範工場」に関する解説書の翻訳である。ナチス・ドイツでは、1936年8月29日の総統令により、「国民労働秩序法及び独逸労働戦線の精神に於て、工場指導者及びその従業員により、ナチス工場協同体の思想を最も完全に実現せる工場」は、『「ナチス模範工場」』³⁸⁾として表彰されることになった。(これは、アルンホルトの著作において「国家的模範経営」として言及されたものと同じものと思われる。)[「工場協同体」とは、「正しき人間指導、献身的労働者保護、工場に於ける同志的結合」によって、「機械の支配者となり、人間を隷属から解放し、人間をして物質に勝たしめ」³⁹⁾るものである。

経営社会政策という観点から見たとき、本書において最も興味深いのは、「模範工場の中心が人間である」⁴⁰⁾ということである。

「ナチス模範工場」は、その模範的な人間指導に基づく「模範工場」に他な

32) 同上。

33) 同上。

34) 同上。

35) 同論考, 32-33ページ。

36) 同論考, 33ページ。

37) 同論考, 32ページ。

38) 独逸労働戦線労働科学研究所編『独逸の模範工場』日独旬刊社調査部訳, 日独旬刊社出版局, 1941年, 11ページ。

39) 同書, 19ページ。

40) 同上。

らない。重要視されるのは機械ではなく、労働の支柱としての人間であり、人間労働力の維持、増進の為に凡ゆる配慮、保護が捧げられてゐるから。⁴¹⁾

したがって、「工場に対する独逸労働戦線の要求」も、次のように「人間的にまとめられ」⁴²⁾る。

労働者の生活意志を強化せよ、工場に対する労働者の関心を呼び醒め、彼等の職業的能力を伸ばせ、彼等の健康を増進せよ、彼等の労働の喜びを保て、之が最も美しい意味の社会行為だ、之によつて君は賢明な、先見の明ある、確実に成功する経済家となるのだ。かくて君は、我々が「ナチス工場の人間指導」と総括的に名づけてゐる要求を満たしてゐるのだ。⁴³⁾

そのため、「模範的な工場指導者」には、「協同体——即ち彼の工場——に与へ得るだけしかこの協同体に求めることは出来ない」⁴⁴⁾という原則に則って、従業員の労働に先んじて自らが従業員のために配慮することが求められる。

企業家の所為は悉くその工場協同体の幸福に対する配慮によって左右されなければならない。これは労働秩序法中にさへ定められた基本要求である。即ち「工場の指導者は従業員の幸福につき配慮すべし」(労働秩序法第二章第二条)。即ち工場指導者の保護義務は最も重要で、従業員の忠誠義務に先んじ、協同体が栄えようとすれば、先ず第一に果たすべき義務なのである。⁴⁵⁾

このような前提に立って、本書では、「模範的職業教育」、「国民衛生に対する模範的配慮」、「模範的寄宿舍・住宅」、および「喜びによる力の模範的増進」などについて詳しい説明がなされている。また、文章による説明を補うものとして、巻頭に、明るい清潔な「教育工場」、工場内に設けられ、労働者が休憩時間を過ごす「緑地」、安価で美味で温かい食事が提供される家庭的な「工場食堂」、衛生的な「洗面所」、快適な「宿営」の写真も掲載されている。

41) 同書、7ページ。

42) 同書、22ページ。

43) 同書、22-23ページ。

44) 同書、23-24ページ。

45) 同書、24ページ。

c) 権田保之助『ナチス厚生団 (KdF)』

「ナチス厚生団」(Kraft durch Freude = KdF)とは、今日では一般に「歓喜力行団」という日本語名が与えられる団体である。ドイツ労働戦線の下部組織であり、文字通り労働者に「喜びを通じて力を得させる」ことを目的として、余暇活動のために様々な娯楽を提供するとともに、安価な国民車(フォルクスワーゲン)の開発などにも携わった。

本書は、この「歓喜力行団」を紹介したものであるが、著者の権田保之助にとって、その目的はひとえに第二次世界大戦における日本の勝利のために、労働生産力を高めることにある。「序」において、権田は言う。

真珠湾頭の電撃、マレー沖の覆滅、かくて世界は遂に來たるべき最後の現実に直面した。旧体制国家群凋落の挽歌に相對して、世界新秩序の建設、大東亜共栄圏の確立の雄々しい聲音が憂々として鳴り響く。而して此の決戦態勢下に於ける高度国防国家の要請に相應じ、大東亜戦争有終の美を済さんが為めには、国民生産力の増強と国民労働力の維持培養を不可欠の要体となすと同時に、勤労国民の生活の向上と勤労国民の文化の昂揚とを絶対的な条件としてゐることには何人も異論を挟むものはないであらう。⁴⁶⁾

権田によれば、こうした目的を達成するには、「先ず以て勤労国民の生活の積極化を図らなくてはならない」が、それは旧來の「個人主義的な方法、自由主義的な取扱いに放置してはこれを所期し得べきものでない」ため、それに代わって「国家的な対策と公明な施設とが樹立され実施されなくてはなら」ない。その際、「我が盟邦独逸に於ける勤労国民大衆の厚生の為めの国家的大機構たる KdF の意図とその事業とを知ること」⁴⁸⁾は、大変有益な示唆をもたらしうる。なぜなら、ナチス・ドイツはすでに政権獲得の時点で「今日の欧州戦争を的確に想定して」、「戦時体制に突入」し、「勤労者厚生の大施設 KdF も厳然たる臨戦態勢下に於ける心構へを以て一切が組織整備されてゐた」ため、「現時の実戦体制下に入るや」否や、「国民生産力の全的増高と、進んでは戦線將士の戦闘意識の發揚とに其の得意の貢献をなし得てゐる」⁴⁹⁾からである。

このように、国家による施策を強く求める権田の考え方は、経営社会政策はもっぱら経営者によって実践され、国家的政策を補うものであるとする経営社会学的

46) 権田保之助『ナチス厚生団 (KdF)』栗田書店、1942年、1 ページ。

47) 同書、1-2 ページ。

48) 同書、2 ページ。

49) 同上。

な考え方とは明らかに異なる。だが、本書では、そのような立場から、歓喜力行団におけるスポーツ、旅行、慰安娯楽、社会教育などの事業、および「労働の美局」(Amt Schönheit der Arbeit)における事業が詳しく説明されている。そこには、次のような従業員の団結を図るために催される「工場協同体の夕べ」(Betriebsgemeinschaftsabend)の紹介も見られるが、ここでも、ナチスの世界観と経営における協同体が同一視されている。

ナチス世界観の根本概念は協同思想への告白である。工場協同体の夕べの開催にあたっては、訓練及社会教育部は此の催しが労働体験を基として構成されて、全従業員団の周囲に一致協力の箍をはめるやうにと勞することであらう。⁵⁰⁾

なお、この催しは、「全国協同体」および「工場協同体」との「緊密な共同作業」により、「工場突撃隊」⁵¹⁾が主体となって実施されるものであった。「工場突撃隊」(Werkschar)とは、1934年11月から、各工場において、ナチス党員でありかつ工場内のその組織に属する優良な青年労働者によって構成され、工場呼集や工場祝祭などの催しに率先して取り組み、工場において共同精神やナチス秩序を擁護するといった任務を負った組織である。⁵²⁾

d) 権田保之助「国民厚生運動のナチス的性格」

本論考は、同じく権田の手になるものであり、ナチス・ドイツにおける「国民厚生運動」の特色を、「ナチス厚生団 KdF」⁵³⁾すなわち「歓喜力行団」を中心に紹介したものである。冒頭、権田は、従来なされてきた厚生事業の特色を次のように特徴づける。

従来の独逸、而して欧米に於ける現在の諸国家の厚生事業、厚生施設なるものは、其の殆んど全部が私人又は私団体の経営にかかるものである。しかも其の中の最大部分が営利的企業主の手によつて運営されてゐるものであつて、厚生事業、厚生施設は即ち福利事業、福利施設の名によつて代表され、それは資本金家、事業主の「温情」に依拠してゐたのである。そして此の「温

50) 同書、68ページ。

51) 同上。

52) 同書、71、81-82ページ参照。

53) 権田保之助「国民厚生運動のナチス的性格」(『ドイツ』七月上旬号、1942年、103-106ページ)、104ページ。

情」は企業利潤を其の限界として其の範囲内に於いて其の発露を見たのであって、此の限界を乗り越えて、勤労大衆の生活を基準として考へられ案出された厚生事業及び施設は到底其の存立を考へる事すらできなかつたのである。⁵⁴⁾

このような考え方は、当時の日本の一般読者に対しては、一定の説得力をもったかもしれない。だが、そこでは、アッペのように、社会福祉的な施策を行うにあたって、独立した人格をもつ労働者の自立意識と公共意識の育成を基礎とした自立的社会秩序形成を重視する経営者がおり、それは従業員に対する支配的な動機が潜む福利方策とは異なるものであったこと⁵⁵⁾が見逃されている。と同時に、例えばフリードリヒ・クルップ (Friedrich Krupp, 1787-1826) のように保護と恩恵の代償として恭順と忠誠を、規律と従属を要求し、企業内外において労働者を雇用者の意志に屈服させることを目的とした家父長主義的・反民主的企業家もいたことは確かだが、⁵⁶⁾それさえも、「社会改革の出発点としての経営および社会改革の担い手」として、その時代には「実践的におおきな意義をもっていた」⁵⁷⁾ことも度外視されている。したがって、経営社会学的な視点から見れば、非常に偏った見方と言わざるを得ない。それにもかかわらず、権田は、自らの考え方に基いて、「ナチス独逸」は、「この厚生施設の領域に全く新しい指標を掲げ、清新なる理念を導入した」⁵⁸⁾という。

これに対して新しきナチス独逸は此の厚生の問題を全く新しい考へ方の上に築き上げたのである。そして其の問題の解決をナチス世界観、ナチス勤労観を通して見事に成し遂げて、厚生問題のあり方を国民協同体の意義にまで高め、「国民厚生問題」といふ新しい課題を新しい独逸の国家に課して、個人としての厚生といふ境から、国民全体としての厚生といふ境地へと展開したのである。斯くして此処に国民厚生運動といふものが発祥した。此の厚生運動の国民的基礎、厚生事業の国民的構想、それこそ、厚生運動に於けるナチス的性格の基調なのである。⁵⁹⁾

このような「ナチス国民厚生運動」⁶⁰⁾の特徴について、権田は、次の5つの点を

54) 同論考、103ページ。

55) 塚本成美「労働社会問題と経営——経営社会学の基層(2)」, 52-54ページ参照。

56) 野藤忠, 前掲書, 173-174ページ参照。

57) 塚本成美「労働社会問題と経営——経営社会学の基層(2)」, 54ページ。

58) 権田保之助「国民厚生運動のナチス的性格」, 104ページ。

59) 同論考, 104ページ。

60) 同論考, 105ページ。

詳しく論じている。

第一の特徴は、「それが新しいナチスの世界観、国家観及び労働観に根底してゐる」⁶¹⁾ ことである。つまり、厚生の問題は「営利主義的企業の打算によつてその打算の範囲内に於いて考へらるべきもの」でもなければ、「個人主義的自由主義によつて左右さるべきもの」⁶²⁾ でもない。

即ち「万人のために一人、一人のために万人」といふ国民協同の意識の上に、「公益は私益に先立つ」といふ国民協同体の理念の上に、階級対立を止揚して、国民協同体への奉仕としての勤労観が成立するのであつて、此処に勤労荣誉、勤労矜持、勤労歓喜が生ずるのである。⁶³⁾

第二の特徴は、「その組織形態の特異点」⁶⁴⁾ にある。それは、「主として各個々の事業場を単位として構成され」、「一に其の事業場の負担能力と事業経営者の熱意の程度に依存せざるを得なかつた」⁶⁵⁾ 従来の組織とは異なる。

新しき独逸に於ける厚生事業の組織は一言にして表はせば、それが国家的のスケールを次々打ち樹てられてゐるといふ点に、その特色と、従つて其の強さが横はつてゐるのである。即ちそれは国民生活全体を対象にして、国家的企画の下に、しかもそれを有機的な体系に組織してゐる所に、ナチス厚生事業の特色がある。⁶⁶⁾

第三の特徴は、「その厚生運動の範囲」⁶⁷⁾ に表れている。すなわち、それは「勤労者の休養慰安娯楽と云ふ範囲をのみ対象」とした「比較的消極的な退嬰の種類のもの」⁶⁸⁾ ではない。

ナチス独逸の厚生運動は新しき国民生活の創造を目標として、厚生範囲を考へられる限りの広い範囲に拡大すると共に、其の中に含まるゝ種類もできるだけ多面的な展開を示している。KdFの組織を見て、其処に「スポーツ

61) 同上。

62) 同上。

63) 同上。

64) 同上。

65) 同上。

66) 同上。

67) 同上。

68) 同上。

局」「旅行局」「慰安娯楽局」「社会教育事業局」及び「労働の美局」が設置されて、しかもその何れもが驚嘆すべき程の大きな活動を為し、見事な効果を上げつつあることに接する時、〔後略〕。⁶⁹⁾

第四の特徴は、「その運動の目標」にある。それは、「労働による疲労の回復」という「消極的な意味」⁷⁰⁾に限定されない。

ナチス独逸の厚生運動は其の目標を「労働の後」に置くことから去つて、それを「明日の労働への力」に据えてゐるのがある。「歓喜を通しての力」(Kraft durch Freude)なのである。⁷¹⁾

権田によれば、この「ナチス独逸が厚生運動に設立した目標こそ」、「興亜日本の、大東亜戦争の理想達成の使命を担へる日本の国民のための厚生運動の目標」として、「大いに我々が玩味しなくてはならぬもの」⁷²⁾である。

そして、第五の特徴は、「其の理想」⁷³⁾である。それは、従来のような「生活の物質的側面に表はれたものに就いてのみの顧慮」⁷⁴⁾にとどまらない。

それは寧ろ積極的建設的創造的な国民生活の樹立と云ふ所に置かれてゐるのである。即ち澁刺たる勤労生活の実際を通し、勤労榮譽、勤労歓喜の貴い国民的体験を通して新しい国民文化の創造をなさんとするのにある。我々はそれと呼んで「勤労文化」の創造と云ふ。〔中略〕血と土の上に、汗と力の上に独逸文化の新しき発祥を期しつつあるのが、実にナチス厚生運動の最高理想なのである。⁷⁵⁾

e) L・ハイデ『ナチスの労働問題』

本書は、ナチスの労働問題に関するキール大学教授ルートヴィヒ・ハイデ(Ludwig Heyde)の著作の翻訳であり、原題は「ドイツの労働者の状況」(*Die Lage des deutschen Arbeiters*)⁷⁶⁾である。

69) 同上。

70) 同論考, 106ページ。

71) 同上。

72) 同上。

73) 同上。

74) 同上。

75) 同上。

76) L・ハイデ『ナチスの労働問題』独逸文化研究会・菊盛英夫訳, 理想社, 1943年, 序。

経営社会政策的な観点から興味深い点は2つあるが、一つは、「経営協団体」にとって法律上決定的な意味を持つ「国民労働体制法（AOG）」⁷⁷⁾に関する言及である。その第一条には、「経営内においては、〈経営指導者たる企業家・被指導者たる労働者・使用人は協働して、経営目的の促進及び国民と国家とに共通の利益のために〉働く」⁷⁸⁾と謳われている。これにより、「経営目的と公益及び国家の利害との絶対的な一致」⁷⁹⁾が明示された。また、第二条によれば、「経営指導者」は、「〈被指導者の福祉を図り、被指導者は経営協団体の精神に基づく誠実を尽さねばならない〉」⁸⁰⁾。つまり、「経営指導者に」は、「経営内において国民協団体の緊急の利害と一致し得る出来るだけ最善の労働関係を創りだす法律的義務」⁸¹⁾が課されるのである。

二つ目は、「経営内の協働精神」は、飲食をふるまうような「お祭り気分」ではなく、「日常における経営の精神」⁸²⁾であるとの指摘である。それにより、経営内において、「利害対立を強調した時代に陥つてゐた如き萎縮」や「陰険、臆病」はもはや見られず、「交際の調子も全く自由な人間同志のそれと変らない」⁸³⁾ものとなった。そして、このような変化は、生産性の上昇のみならず、「経営に関する社会政策の著しい成果」⁸⁴⁾をもたらした。すなわち、「疾病の際にも賃金支払を続行すること」、「病気の被指導者成員を婦人経営保護官によつて世話すること」、「共済基金や恩給金庫」の設立、「運動場及び工場住宅」の建設、「解雇通告保護を自発的に拡大」⁸⁵⁾などである。

以上のように、1941年から1943年の日本では、ドイツ労働戦線と歓喜力行団を中心にナチス・ドイツの厚生事業が紹介され、戦時下における労働生産性の向上のための施策の模範とされていた。そこには、1940年9月に締結された日独伊三国同盟によって日独が軍事同盟関係を形成するとともに、両者がともに戦争状態にあったという事情があろう。経営社会政策という観点から見たとき、そこには、労働者の生活の向上を図ることが経営の義務とみなされている点で、ワイマール共和国時代の経営社会学的な議論の成果の継承が見られる一方、ナチスの世界観

77) 同書、66ページ。

78) 同書、69ページ。

79) 同上。

80) 同上。

81) 同上。

82) 同書、72ページ。

83) 同書、73ページ。

84) 同上。

85) 同上。

に基づいて国家がその主たる担い手とされ、何よりも戦争に勝つことが究極的な目標とされているという点では異質なものである。

5. 日本における『硝子の驚異』の受容

ところで、このように日本でナチス・ドイツの厚生事業が受容された時期は、まさにシェッフェルの『硝子の驚異』が受容を見た時期でもあった。その受容は、全体としては国家主義的科学技術文学として特徴づけられるものであり、中には光学兵器というより特化した観点でまとめられるものも見られる。

5.1. 国家主義的科学技術文学としての受容

a) 藤田五郎「K. A. Schenzinger: Anilin — 自己紹介の記 —」, 「ドイツ科学技術文学の現状」, 「生産文学の諸問題」

『硝子の驚異』の国家主義的科学技術文学としての受容において最も重要なのは、「ナチス文学としての生産文学」という指摘である。これについては、関連する多くの作品の翻訳者である藤田五郎が3つの論考で論じているが、例えば次のように定義づけられる。

ナチス文学としての生産文学はより広い国民層へ一層高度な科学技術の知識を扶植することによつて、科学への意欲と生産への勇猛心を湧き起こさせるものである。⁸⁶⁾

つまり、それは「科学知識の普及」⁸⁷⁾を目的とするものであり、「科学技術文学」⁸⁸⁾と言い換えることもできる。また、藤田によれば、文学には一般に「世界主義的な要素」と「国民主義的な要素」⁸⁹⁾がある。前者は「ひろく『人間』を中心に埒し来つて、国民よりも寧ろ世界に繋がらうとする」文学であり、後者は「民族的、国粹的なものに重点をおき、自国人の精神や業績に最大の関心を集める」⁹⁰⁾文学である。この観点から見たとき、「過去のドイツ文学は動々ともすればこの世界主義的要素の跳梁を許し、ゲーテの文学さへその例外を為すものでない」が、それに対し、「ナチス文学はこの意味に於けるドイツ文学の伝統を破つて、極力ド

86) 藤田五郎「生産文学の諸問題」(『理想日本』第三巻・第五号, 1944年, 42-47ページ), 44ページ。

87) 同論考, 45ページ。

88) 藤田五郎「ドイツ科学技術文学の現状」(『技術評論』10月号, 1943年, 26-27ページ), 26ページ。

89) 同上。

90) 同上。

イツ人のために壮麗な記念碑を樹立しようとする」⁹¹⁾ものである。

ナチス文学としての科学技術文学は、従つてドイツの科学、ドイツの技術、並びにその担当者たるドイツ人の業績を素材とし、これを現在に再現することにより、一層優れた未来の創造に働きかけようとする文学だと定義されると思ふ。⁹²⁾

その意味で、ナチス文学としての生産文学＝科学技術文学は、単に科学的な知識の普及を目的としているわけではなく、「民族的感奮の興起」⁹³⁾といった「高度に政治的な性格を課せられて」おり、「教化の有効適切な手段」、「国策を強力に遂行する武器」⁹⁴⁾でもある。

ただし、だからといって「生産文学」は決して「見え透いた宣伝の低劣な具」⁹⁵⁾ではない。それは「どこまでも文学としての純粋性を保持」し、「かぐはしい芸術の香気を発散」しており、まさに「この芸術的純粋性」によって「国民精神作興の一環たる役割を演じ、ドイツ民族の精神的防塞となつてゐる」⁹⁶⁾のである。そのように、「生産文学」が「単純な御用文学でない」ことは、「科学対人間といふ永遠の問題」ひとつをとっても、「決して科学対ドイツ人といふ狭い視野においてのみ取扱はれて」⁹⁷⁾はいないことにはっきりと表われている。というのも、そこでは、「永遠の相の下に」、「ドイツ人はもとより含まれての人間一般」⁹⁸⁾が科学と対決させられているからである。つまり、「ひろく科学技術の高進に寄与した科学人の群像」が、「民族と国境とを越えて浮彫にせられ」、「ドイツ人の昔からの好敵手たる英人の業績すら、正当な観点の下に公正妥当な評価を与へられてゐる」⁹⁹⁾のである。ただし、それにもかかわらず、最終的には「それらの群像の上に一際陸離たる光彩を放つドイツ人の姿が、眼もまばゆく輝き出る」がゆえに、ドイツの読者の胸には、「科学への逞しい意欲」と同時に、「押へ難い祖国愛」¹⁰⁰⁾が湧き起こることになるのである。

91) 同上。

92) 同上。

93) 藤田五郎「生産文学の諸問題」, 45ページ。

94) 同論考, 44ページ。

95) 同上。

96) 同上。

97) 同上。

98) 同上。

99) 同上。

100) 同上。

なお、「生産文学」という名称自体は、当時のドイツで用いられたものではないようである。これについて、藤田は、自問自答の形で次のように述べている。

„生産文学といふのも文学史からとつた名称かい“ „いや、あれはこつちの
 パテントだよ、こつちの生産さ。そこが生産文学の生産文学たる所以だ。い
 つまでもドイツの後塵ばかり拝してゐるわけにもゆかんじやないか。〔後略〕“¹⁰¹⁾

藤田はこれ以上説明していないため、詳細は不明であるが、プロレタリア運動の方向転換に伴って、1934年頃から生じた「生産文学」と呼ばれる一群の作品と関連があるかも知れない。それは主に農村での生産の現場を描くものだが、やがて生産力の向上を至上とする戦時下の国策に取り込まれいった。¹⁰²⁾ 実際、第二次世界大戦中の日本では、軍需生産増強を目的として、「生産文学」と呼ばれる文学作品の執筆が奨励されていた。大政翼賛会文化副部長を務めた日比野士朗によれば、それは「戦力と生産力に物を言はせて、撃てども払へども後から――と南北の守備を襲うて来る」敵に対抗して軍需生産の向上を図り、「一機でも、一弾でも前線へ」送るべく「軍需生産の火花のなかに赴く人々の姿」¹⁰³⁾を描いた文学であり、上記のようなドイツの「生産文学」のナチス的傾向とも呼応するものである。

では、藤田のいう「ナチス文学としての生産文学」とは、具体的にどのようなものだろうか。それについて、藤田はおおむね「一九三三年から一九三九年頃までの傾向の概観」¹⁰⁴⁾を紹介している。それによれば、まず作家については、「文学者が活動の範囲を更に科学の領域まで拡大した場合」と「科学人が文学の分野に驥足を延した場合」に分けられ、前者に該当するのは「純粹の文芸人」であり、後者に該当するのは「K・A・シェンチンガーを筆頭とする生え抜きの科学人」¹⁰⁵⁾である。また、作品の傾向も二つに分けられる。一つは「一人の科学者の伝記を主流にし」、「過去の偉大な科学人の血と汗と泪の生涯を、鮮やかに文学に捉へて再現し得た作品」¹⁰⁶⁾である。例えば、「ネーヤーの『レントゲン』、シュッフエルの『波をくぐる者』(ヴィルヘルム、バウアーが潜水艦の着想を現実化するまでの苦闘を描く)、ロエフの『天才的愚者』(ツエツペリーンの生涯の文芸による再現)、

101) 藤田五郎「K. A. Schenzinger: Anilin ― 自己紹介の記 ―」(『独語文化』第五巻・第六号、1942年、56-59ページ)、57ページ。

102) 日本近代文学館「プロレタリア文学運動の光芒」(<https://www.bungakukan.or.jp/cat-exhibition/14339/> 最終閲覧日は2025年7月27日)。

103) 日比野士朗『生産文学』みたま出版、1944年、2ページ。

104) 藤田五郎「生産文学の諸問題」、46ページ。

105) 同論考、45ページ。

106) 同上。

ビルケンフェルトの『黒い魔術』（ゲーテンベルクが印刷術を完成させるまでの闘争を叙す）等々」、および「子息ディーゼルによる伝記『父ディーゼルを語る』」¹⁰⁷⁾などが該当するのに加え、「無名の英雄の空に挑む敢闘精神を興味津々とした小説の形に盛ったもの」として、「ネーヤーの『征空記』」¹⁰⁸⁾もこれに加えることができる。もう一つは、「複数の科学者の活動を有機的に結合して、いはば科学史の流れの文芸化ともいふべきもの」¹⁰⁹⁾である。例えば、「科学者たる文人シェンチンガー」の「『アニリン』『金属』等の諸作」が該当し、それらにおいては「過去数世紀にわたる科学技術の駿々たる進展の跡」¹¹⁰⁾が芸術化されている。ちなみに、これらの作品の多くは、次の通り、同時代に翻訳・出版されている。

- ・F・L・ネーエル『レントゲン』常木実訳、天然社、1942年
- ・K・A・シェンチンガア『アニリン』藤田五郎訳、天然社、1942年
- ・ハンス・ノーヴァク『亜鉛』藤田五郎訳、天然社、1943年
- ・K・A・シェンチンガア『金属』（上）藤田五郎訳、天然社、1943年
- ・K・A・シェンチンガア『金属』（下）藤田五郎訳、天然社、1943年
- ・ギュンター・ビルケンフェルト『黒い魔術』大澤峯雄訳、天然社、1943年
- ・ヴォルフガング・ロエフ『ツェッペリン』藤田五郎訳、天然社、1944年
- ・F・シェッフエル『硝子の驚異』藤田五郎訳、天然社、1944年。

藤田によれば、これらの「生産文学」の作家は「いずれも比較的若い世代に属し、みなナチス革命の思想的洗礼を受けている。」¹¹¹⁾したがって、その作品にも、「過去の偉大さを国民の精神に鼓吹し、民族将来の運命に積極的に寄与」する「ナチス文学」¹¹²⁾としての特色が自ずと表われてくる。例えば、「ナチスドイツ文学の根本精神」に通じる「英雄の讃仰」¹¹³⁾、指導者原理、全体主義、生活権、ヴェルサイユ体制への不満、協商国への敵対心といったものである。この点について、藤田は次のように述べている。

この作品〔＝『硝子の驚異』（引用者注）〕にあつては光学硝子界の三英雄
——エルンスト・アベ、カール・ツァイス、オットー・シュツトの伝記を中

107) 同上。

108) 藤田五郎「ドイツ科学技術文学の現状」, 27ページ。

109) 藤田五郎「生産文学の諸問題」, 45ページ。

110) 同上。

111) 藤田五郎「ドイツ科学技術文学の現状」, 27ページ。

112) 同上。

113) 同上。

心として、ドイツ硝子工学の発展史が述べられてゐる。¹¹⁴⁾

この作品〔＝『硝子の驚異』（引用者注)〕にはナチスの全体主義の色調が殊に色濃く滲み出してゐる。この一卷のモットーに掲げられてゐる如く、個人は全体を前提としてのみ存在の意義を有し、各人の一身が自己に属して然も自己に属しないことがくり返し強調されている。¹¹⁵⁾

„アニリンとてもナチス文学である以上、Führerprinzip が滲み出てゐる。例へば化学オーケストラなるもの論じてゐる Duisberg の親爺などは、その典型的な一例だ。個人なんか問題じゃない。個を滅して全体へ奉仕することが問題だ。〔後略〕“¹¹⁶⁾

„〔前略〕大体アニリンに限らず、生産文学つて奴が此の指導者精神を建前にして、それをさかんに強調してゐる。現に俺の訳した „Gläserne Wunder“ といふ Scheffel の作品を、目下鋭意校正してゐるが、そのモットオからして、誰も自分がゐながら自分の身体ではない‘ といふのだ。より大なるもの、より高きものへの奉仕を強調し、例の Ernst Abbe の実例によつてそれを展開してゐる。我々が世に問ふドイツ生産文学紹介の第二弾だ。第三弾は Schenzinger の Metall で、これは目下発酵中といふわけさ。“¹¹⁷⁾

„ナチス文学なら Lebensraum のことにも触れてるだらう?“ „大に触れてるな、さつき云つた Horn がインドで活躍することも、つまりはそれと関係がある。〔中略〕ここで云ふ Herren ていふのは、ヴェルサイユ旧体制を墨守する手合だよ。〔中略〕彼らの意見てのはな、ドイツ人から海外活動を奪へつていふ意見なんだ。〔後略〕“¹¹⁸⁾

„〔前略〕例へば天然インヂゴと人造インヂゴの対立をめぐる独英の決戦、ドイツ科学精神のイギリス商業主義に対する勝利、これなどは実に手に汗を握らせるやうに面白い。生産文学はつまり世界観文学でもある。〔後略〕“¹¹⁹⁾

114) 藤田五郎「生産文学の諸問題」、46ページ。

115) 同上。

116) 藤田五郎「K. A. Schenzinger: Anilin — 自己紹介の記 —」、58ページ。

117) 同上。

118) 同上。

119) 同上。

b) 大村政幸「文献渉獵」

本書評では、『硝子の驚異』に見られる科学と国家との結びつきと政治家の科学的な認識の広さが、日本には欠けているものとされている。

小説のヤマはツァイスの死後工場の全責任者となった学究的指導者としてのアッペの多くの戦を描いた最後の一五〇頁にあることは確かであるが、われわれはむしろこのツァイス、アッペ、ショットの三人の運命的なつながりと光学的な問題との戦ひについて述べた前半により多くの興味を惹かれる。それと共に、ドイツのこうした科学者の伝記を読めば読むほど感ぜられることは、科学と国家のむすびつきとか、政治家の科学的な認識の広さなどに対する一種の羨望の念である。¹²⁰⁾

c) 緋田工『大東亜建設と国民建設』

本書は、大東亜新秩序建設のために必要な翼賛体制を実現することを目的としたものであり、著者が日本国体研究所の機関誌『国民建設』に発表した論稿を加筆・収録したものである。¹²¹⁾『硝子の驚異』に触れた箇所では、この作品が科学的知見を工業的に応用する上での模範と見なされている。

東北帝大で有名な世界的齒車理論の一權威、成瀬教授近刊の名著「独逸工業会の印象」を繙いた者は誰でも『日本にも優れた科学者がゐないのではない。唯、優れた学者の研究成果を敏感に、良心的に現実工業の上に移してゆく事業者が足らないのだ』といふことに気付くであらう。独逸の光学工業の発達に関し、實際家たるツァイスとアッペとショットとの涙ぐましい協力の歴史を吾々に示してくれたのは、近刊「硝子の驚異」（シエツフェル著、本誌前号に紹介）であった。将来日本の工業は、大学その他科学研究機関の研究室と緊密に結びつき、常に最新の学理を實際産業の上に結実せしめるために最善の努力を払はなければなるまい。¹²²⁾

d) 文政研究会編『文教維新の綱領』

本書は、「皇国の隆替を決すべき今次大東亜戦争」において「国家の人的物的資源のすべてを挙げて之を戦力化」する上で、「教育の戦力化」¹²³⁾を図ることを目的

120) 大村政幸「文献渉獵」（『映画技術』12月号、1942年、79-80ページ）、79-80ページ。

121) 緋田工『大東亜建設と国民建設』成武堂、1943年、1-3ページ。

122) 同書、351-352ページ。

123) 文政研究会編『文教維新の綱領』新世紀社、1944年、2ページ。

としている。そこでは、これまでの科学教育、技術教育において「科学と技術との間に十分な結びつきがなかった」¹²⁴⁾ことが問題とされる。

いふまでもなく「ものごとを知る」科学と「ものごとをつくる」技術との間には常に密接不可分な関係があるのであつて、このことについては科学史のいろいろな部面から幾多の実例を引き出すことができる。更に現在技術方面の問題に直接つき当つて見ると、真に新しい技術を創りだすためには、立ち入った理論がなければならぬことがはつきり知られるのである。¹²⁵⁾

そして、こうした結びつきを示す好例して、『硝子の驚異』が取上げられる。

序ながら一例を示しておかう。それはドイツのエナにある世界一の硝子工場であるツァイス会社の建設記の一節であるが、これについては最近訳出された『硝子の驚異』といふドイツの生産文学書によつても知ることができる。¹²⁶⁾

文政研究会によれば、アッペはそのころめずらしい学者で、ツァイスと気心が合ふとすぐ大学の研究室を去って、工場に飛び込んで行き、「科学と技術の協力的開拓事業」¹²⁷⁾が始まった。そして、ツァイスが技術そのものの指導と工場経営の仕事に携わる一方、アッペは現場からの要求に即応しながら光学機械に関する学理を立ち入って研究し、ツァイスはその成果を焦らず待った。やがて基礎研究が成功すると、それがすぐ現場に持ち込まれ、それを武器として様々な改良製作が行われた。こうして「世界に冠絶するツァイス工場」¹²⁸⁾が見事に形づくられ、ドイツの興隆に大きな役割を果たすこととなったのである。

e) 匿名「読書」

以上のように見たとき、同時代の日本における『硝子の驚異』の受容においては、アッペ、ショット、ツァイスといった人物が、大東亜戦争の勝利という国家的な目的のために科学的知見を応用するための模範的な事例として評価されていたことがわかるが、これに関連してもう一つ指摘しておきたいのは、匿名の書評に見られる次のような一節である。

124) 同書、208ページ。

125) 同上。

126) 同上。

127) 同書、209ページ。

128) 同上。

更に後段に至つてアッベが国家社会主義思想の持主として活躍する辺りは、現代独乙に於ける政治的意図を多分に盛り込んで居るもので原作者としては可成り力を入れた箇所であると思はれる〔後略〕。¹²⁹⁾

ここで注目したいのは、アッベが「国家社会主義思想の持主」とされていることである。この指摘は、これまで見てきたような「生産文学」の「ナチス的」な特徴からすれば当然のこのように思われるかも知れない。だが、ここにはもう一つの理由がある。それは、『硝子の驚異』では、アッベに関連して Sozialismus という語が5回用いられており、一般的には単に「社会主義」と訳すべきところを、藤田はすべて「国民社会主義」と訳しているということである。「国家」と「国民」の違いはあるが、ナチズムの邦訳であることは言うまでもない。したがって、翻訳だけを読む読者がアッベを「国家社会主義思想の持主」と受け取ったとしても、仕方のないことであろう。アッベの生没年を考慮すれば、ナチズムを念頭に置いた「国民社会主義」という訳は明らかにアナクロニズムではあるが、この訳の是非については、後に改めて検討することにしたい。

5.2. 光学兵器という観点からの受容

a) 工業化学懇談会編『耐火物工業』

さて、大東亜戦争との関連でもう一つ興味深いのは、光学兵器という観点からの『硝子の驚異』の受容である。言うまでもなく、光学兵器の製造に光学硝子が不可欠であり、ドイツの光学兵器を支えているのがツァイス社の硝子であることは、当時の日本でも常識であった。例えば、工業化学懇談会編の『耐火物工業』では、次のように言われている。

国防用の硝子として直ちに指を屈するものは何と云っても光学硝子であり、兵器の眼としてのレンズ、プリズムが如何に重要なものであるかは一般の常識となつてゐるところである。¹³⁰⁾

独乙の兵器の有する優位の一因は実に世界的光学硝子及び寒暖計用硝子、着色用硝子として知られたエナ硝子を有することであり、精鋭なる独乙軍の心臓部と言はれてゐる所以である。¹³¹⁾

129) 匿名「読書」(『技術評論』11月号, 1942年, 51-55ページ), 53ページ。

130) 工業化学懇談会編『耐火物工業』平凡社, 1943年, 362ページ。

131) 同上。

したがって、光学硝子を輸入のみに依存しては、戦争勃発によって輸入が困難となった場合、国防上の問題を生じかねない。そのため、例えば海軍は、すでに1915年より、東京高等工業学校に協力を求めて、光学硝子の製造研究に着手していた。¹³²⁾

b) 会田軍太夫「序」(藤田五郎訳『硝子の驚異』)

硝子研究の専門家会田軍太夫もまた、藤田五郎訳『硝子の驚異』の「序」において、兵器の製造という観点でツァイス社と本書が持つ意義を次のように述べている。

カール・ツァイス社は、今日、各種研究用工業用測定用光学機械から望遠鏡はもちろんのこと、天体の模様を坐らにして観測できるプラネタリウム装置の設計製造のほかに、いまや、精鋭なるドイツ軍の心臓をなしている光学兵器の供給所となるにいたつてをすることは想像に難くならう。¹³³⁾

いまや、科学振興が叫ばれ、科学技術こそ国を強化する原動力であるかとも思はれるにいたつている今日、しかも、大東亜戦完遂のために、欠くことのできない光学兵器に、レンズ系と硝子が基本になつてゐるとき、ここに、われわれの求めて止まない優秀なる光学レンズと光学硝子の発祥地であるドイツのイェナ市におけるカール・ツァイス社の発展史ともいふべきものを気楽に読める小説として、訳出されたことを、わたくしは心からうれしく思ふ。¹³⁴⁾

c) 片岡健次郎「『硝子の驚異』を讀みて」

満州航空の社員であつた片岡健次郎は、『硝子の驚異』の読後感の中で、ドイツに比べ、日本は「航空写真特に測量方面を見るに未だ器材の国産化と云ふ所迄はとても行つてゐない」ことを「甚だ遺憾に感じ」、「今後我々の目標は使用する器材を国産化する点に置くべきではあるまいか」¹³⁵⁾と言う。そして、そのために、日本の器財界にもツァイス、アッペ、シュットのような人物が現れることを希求する。

此の見地から我国の器材界を見るに、カールツァイスは相当居る様である

132) 荒川龍彦『ニコン物語』朝日ソノラマ、1981年、178-179ページ参照。

133) 会田軍太夫「序」(F・シェッフエル『硝子の驚異』藤田五郎訳、天然社、1942年、1-4ページ)、2ページ。

134) 同序文、3ページ。

135) 片岡健次郎「『硝子の驚異』を讀みて」(『満航』5月号、1943年、33-39ページ)、38ページ。

が、アツベの役をする人が居るであらうか？ 更にアツベの着想を実現させるに欠くべからざるシヨットが居ないのではないだらうか。否、居ても吾人の寡聞が其れを見出し得ないのではなからうか。そう考へると自分の視野の狭さをつくづく嘆ぜざるを得ない。

勿論我々は光学器材の使用者であつて、製造業者ではない。従て我々の手で器材を作る事は出来ないし、今更製造業者に転業した所で大した、成果が挙げられるものではない。

併し我々がアツベを見出した時、其の人間に吾人の要求を申し伝へるだけの努力は必要だと思ふ。又シヨットを見出した時、彼に我々の必要事項を伝達させるに必要な知識を今からでも涵養して置く必要があると思ふ。之が為めには、相当の努力と細心の注意を以て得た経験を科学的に整理して置く必要があるは云ふ迄もない。此の見地から我々の行動を批判すると甚だ慙愧に堪へぬものがある。カールツアイス、アツベ、シヨットのあの熱意、あの努力、之は独り技術方面でなく、事務方面にも必要ではなからうか「自分は執務時間中に与へられた事をやつてゐるのだ、だから休み時間には差し迫つた用件があつても、自分の好きな「道楽」話位はしようよ！」と云ふ理論が通ると考へる人があつたら一度「硝子の驚異」を読む事を薦める。あの努力、あの熱意、而も同一方向を向く三人の協力、之が世界に追従を許さぬ今日のカールツアイスを築いたのだと自分は信じて疑はない。¹³⁶⁾

むしろ、このような片岡の考えもまた、大東亜戦争の勝利を目指してのものである。

真に「日本の航空写真測量」を育て上げんとする士あらば、皆でアツベたらんとする努力を将来に向つて続け様ではないか！ アツベたらんとする士、シヨットたらんとする学究の徒之等の人々が打つて一丸となり、大東亜戦争を勝ち抜くための火の玉とならうではないか！¹³⁷⁾

d) 長山三男「精密兵器の大量生産」

陸軍造兵廠の職員であつた長山三男は、精密兵器の大量生産という観点から、『硝子の驚異』を手本とする。長山によれば、戦闘において攻撃を命じられたとき、兵力の不足や兵器の不備を口実として攻撃をせずにいることが許されないの

136) 同書、38-39ページ。

137) 同書、39ページ。

と同様、精密兵器には急激な生産拡充が不可能だとすることも許されず、またそれが可能となるかどうかは、「工場指導者に不退転の信念の有るか無きか」¹³⁸⁾に懸かっている。「あの人の言ふことなら無理でもやらう、といふやうに工員まで一致して笑つて難局に立つといふ精神的団結」を図るために、「精密兵器の担任指導者」には「特に必勝の信念」¹³⁹⁾が求められるのである。

この意味において精密兵器の大量生産を完遂するためには、いはゆる指導者原理の実現が必要なのである。小説「硝子の驚異」に書いてあるアッベの努力を見れば、その点は明瞭であらう。¹⁴⁰⁾

6. 「生産文学」をめぐる日本での議論

6.1. 「生産文学」振興

a) 藤田五郎「生産文学の諸問題」

ところで、論考「生産文学の諸問題」における藤田の「ドイツ精神の発現としての生産文学をめぐる諸問題」の検討の目的は、「それが我国文学の同一方向に与ふる示唆に考察の目を向けること」¹⁴¹⁾にある。

大東亜戦の現段階が益々苛烈な科学戦たり技術戦たる相貌を濃くして来た今日、国民の各層にわたる科学技術知識の急速な浸透は、正に焦眉の急を告げつつあり、これと共に卓越した普及力と教化力とを与へた文芸がこの方面に於いて課せられた使命も、愈々重かつ大を加へて来たことは、識者のひとしく認めるところである。吾人が今日まで幾度かドイツ生産文学の紹介に微力を致して来たのも、それが激動する世界情勢の中にあつて著しい変貌を遂げている我国文化の一つの面に、然るべき反応なり反響を生むことを期待乃至予想して行つたものである。¹⁴²⁾

藤田によれば、日本には「真の文学として推奨し得る科学技術を題材とした作品は其数極めて乏しく」、「その最も優秀なものすら何となく科学の周囲を迂回しながら摸索を試みてゐるが如き、一抹の心許なさを感じしめないではゐない」¹⁴³⁾い。

138) 長山三男「精密兵器の大量生産」(『科学朝日』11月号, 1943年, 38-42ページ), 38ページ。

139) 同上。

140) 同上。

141) 藤田五郎「生産文学の諸問題」, 42ページ。

142) 同上。

143) 同論考, 46ページ。

それは、一つには「作家の科学観の稀薄や科学的素養の不足」によるが、それは「筆を執る者の自覚によつて必ずや一掃され得る」¹⁴⁴⁾ものである。それよりも重要な問題は、「文学界に漲つてゐた『科学の尊重は文学の滅亡を結果する』といふ、誤てる先入見」¹⁴⁵⁾である。「先験的な問題は従つて文学と科学とは決して二者択一の関係にあるのではなく、相互的補完の表裏一体関係にあるといふ認識の徹底」¹⁴⁶⁾である。そこで、藤田は、「然らばいかなる題材によつて科学と文学の交流を行へばよいか」¹⁴⁷⁾と問い、4つの可能性をあげる。

一つ目は、「従軍記乃至生産関係の報道文学」¹⁴⁸⁾である。

最も進歩した科学技術の粋がその研を競ふ生産の職場や、技術と技術とが凄烈に相搏つ現代戦の諸相を、報道に挺身しつつ生々しく体験する人々が、彼らの文才發揮の舞台を過去の単なる平面的浪漫的な雰囲気描写のみに止めず、更に進んで科学技術の知識を駆使して更に次元を増した立体描写に求めるならば、上記の期待が無残に裏切られることはあるまい。¹⁴⁹⁾

二つ目は、「ドイツ生産文学の単純な模倣は全然意味をなさないにしても」,「やはり伝記物」¹⁵⁰⁾である。

我国に於いても既に徳川時代の昔から偉大な科学者が幾度かその巨姿を現して来た。かかる英雄が日本的な理念と日本的な構想の下に、伝記的文学として完成を見る日が待望されるのである。¹⁵¹⁾

三つ目は、「『アニリン』の垂流ではないが、何らかの物質、何らかの機械技術等を芸術化する方途」,ないしは「上述のあらゆるものを打つて一丸とし、過去現在未来に繋る雄渾無類の文学」¹⁵²⁾である。

そして四つ目は、「芸術的香気の高い科学随筆」¹⁵³⁾である。

144) 同上。

145) 同上。

146) 同上。

147) 同上。

148) 同上。

149) 同論考, 46-47ページ。

150) 同論考, 47ページ。

151) 同上。

152) 同上。

153) 同上。

表現手法の清新も、表現手法の科学性もこの分野から新生するかと思はれる。由来我国の科学界には、文才に恵まれた科学者の早くから輩出したことに照しても、この待望は必ずしも空しくはなさうである。¹⁵⁴⁾

このような4つの「捷径」¹⁵⁵⁾を示した上で、藤田は最後に、「生産文学の作家は科学的文芸人たるか、乃至は文学的科学人たるか」¹⁵⁶⁾と問い、次のように述べる。

広汎な国民層を瞬時も早く科学技術的に教育することが、戦時国家の至上命令の一とされてゐる秋に当つては、科学知識を消化体得しきつてゐる科学人の^{ママ}ち、文芸的資質を豊富に擁する士の奮起を第一番にまつことが、まづ科学知識の吸収消化を要する文芸人の活動にまつよりも、時局の要請に応へる手取り早い方策であらう。¹⁵⁷⁾

したがって、「若し又科学的文芸人にして即刻この活動を実現し得る者があれば、もとよりこれ以上の望ましきことはない」¹⁵⁸⁾のである。

b) 座談会「科学技術と文学」

このように「生産文学の生れ出る機運」¹⁵⁹⁾を高めようとする藤田の思いと連動するように、当時の日本では、「科学技術文芸作品」¹⁶⁰⁾という文学賞の公募が行われていた。そのことがわかるのは、雑誌『改造』で行われた座談会「科学技術と文学」である。出席者は、有馬頼寧、高野六郎、岸田日出刀、木下杢太郎、大佛次郎、林麟、岩田豊雄、高橋健二、石垣純二である。

司会の石垣によれば、この文学賞は、「改造社と日本技術協会との共同主催」¹⁶¹⁾により実施されるものであり、大きく2つの目的を持っている。一つは、「科学技術を国民に浸透させますことは、現在の時局或ひは戦局上最も急務だといふこと」であり、そのための「啓蒙の手段として科学技術に関する文芸の発達或ひはその

154) 同上。

155) 同論考、46ページ。

156) 同上、47ページ。

157) 同上。

158) 同上。

159) 同上。

160) 「科学技術と文学 座談会」(林麟・木下杢太郎・高橋健二・岸田日出刀・高野六郎・大佛次郎・岩田豊雄・有馬頼寧・石垣純二)(『改造』第25巻・第10号、1943年、所収ページ未確認；『木下杢太郎全集』第25巻 岩波書店、1983年、474-491ページ)、引用は『木下杢太郎全集』、474ページ。

161) 同上。

機運を刺戟をしよう」¹⁶²⁾とすることである。もう一つは、従来「科学者は文学を軽視する、文学者は科学を理解せず」というように、「科学技術と文芸といふものの間が、非常に離れて」いたのに対し、「科学と文学といふものは非常に類似性、相同性があるんだから、これはもつと接近させるべき」¹⁶³⁾だということである。そして、参考とすべき事例として、ドイツの「生産文学」をあげる。

最近、「硝子の驚異」とか「レントゲン」とか、所謂新興生産文学といふものがドイツから紹介されましたが、あれが非常に或る意味においては成功しましたのですが、ああいふ科学技術発展史的な物語を日本の一般の文芸家の方が調査したり、或ひは材料を技術者から仰いだりなんかして書いて戴くことが多くなりますと、非常に面白いぢやないかと思ひます〔後略〕。¹⁶⁴⁾

また、高橋健二によれば、「工場側で産業戦士が俳句を作つたり、歌を作つたりする」¹⁶⁵⁾ことも奨励され、この文学賞への応募も期待されていた。

高橋 われわれも大いに奨励してゐます。だから私は密かに、この産業戦士の中に、機械を取扱つてゐる者が、かういふ科学技術文学に応募してくれるやうだと非常にいいと期待してゐるのです。¹⁶⁶⁾

また、高橋は、石垣からの「生産増強といふ上に科学技術文芸がどんな風に生きて働くだらうか」¹⁶⁷⁾という問いかけに対して、次のような効果を指摘している。

高橋 やはりその点ではさつきお話があつたやうに、陸海軍が報道班員を付けて、戦況の微妙な点までを知らせる。戦争の真相を知らせて国民に戦争にたいする意識を強めるやうに、工場といふ生産に直接携つてゐる面がどういふ姿であるかといふことを国民一般が知つてこれを支持するといふ気持ちにならなければいけないだらうと思ふんですね。さういふ意味で戦線にたいする報道班員と同じやうな役目を果す人がぜひなくちやいかんと思ふんです。¹⁶⁸⁾

162) 同上。

163) 同上。

164) 同座談会、475ページ。

165) 同座談会、483ページ。

166) 同上。

167) 同座談会、489ページ。

168) 同上。

高橋 それはかういふ時局に、小さい私小説ばかりある場合と、工場を主題にした非常にいい小説が澤山出るのとは相当違ひがあるんじゃないかと思ふんですがね。¹⁶⁹⁾

6.2. 生産文学批判

このように、第二次世界大戦中の日本では、ドイツの「生産文学」を手本として、科学技術的な文学作品が執筆されることが期待されていた。しかし、他方で、ドイツの「生産文学」に対する受け止め方は、必ずしも一面的に肯定的なものではなかった。ここで、そのことを示す資料を4つとりあげておきたい。

a) 青柳優「新しき生産文学について——『アニリン』に関連して——」

青柳優は、『アニリン』において、「科学者達の学的情熱、その学者達に点綴されてゐる女性達の控え目なしかも熱烈な愛情、瘡癤の地で苦闘する医師のヒューマニティ等、『物質』を遡る人びとの姿体」などが「絢爛と描かれて」おり、「感動を唆らずには措かない」¹⁷⁰⁾ ことを評価しながらも、「生産文学」において、文学の中に物質といった他の素材的要素が導入されていることを問題視して、次のように述べている。

この方法の為に、科学と文学を、最初から分離したものとして、文学を科学に隷属させ、ある一つの科学的な証明のために文学を手段として駆使する結果になる。所謂生産文学の困難さは、ひとしくこの点に在るのだし、今までの悉くこの種の作品はこの陥穽に陥り、結局単に文学として低いものだったばかりでなく、文学以外に在った作者の意図をも尽し得ない結果になるのであつた。¹⁷¹⁾

b) 座談会「アニリンと微生物を追ふ人々——科学書翻訳の問題——」

日本科学協会で催された座談会には、石井信太郎（伝染病研究所）、稲村耕男（東京工業大学化学教室）、江上不二夫（東京帝大化学教室）、中村浩（東京帝大植物学教室）、畑一夫（東京帝大化学教室）、平澤直一（東京工業大学化学教室）、山口清三郎（徳川生物学研究所）、湯浅明（徳川生物学研究所）が出席し、科学書の翻訳をめぐる意見を交わした。

169) 同上。

170) 青柳優「新しき生産文学について——『アニリン』に関連して——」（『ドイツ』六月上旬号、1942年、111-115ページ）、115ページ。

171) 同上。

特に問題となったのは、『アニリン』とポール・ド・クライフの『微生物の狩人』(1926)であるが、前者について、山口から「文学的に見て全体が一つの大きい建築物を構成してゐると思ふのです。その点成功して居るのではないかと思います」¹⁷²⁾という肯定的な評価が出された一方で、特に稲村からは、両作品に対して厳しい意見が出された。

稲村 「微生物」の方は伝記を集めたものですね。さういふ感じが抜けきれないでせう。「アニリン」の方はずっと小説的になつて居ります。しかし、非常に通俗的な小説です。これを新らしい形の文学などといふのは非常にをこがましいと思ひますね。文学にしても大衆小説位の所ではないかと思ふのですがね。¹⁷³⁾

稲村 しかし、僕は「アニリン」は映画の程度の高さしかないと思ふのですよ。非常に通俗的で、大衆的であつて、決して文学などといふものではないと思ふのです。もつとこなして、科学を高い文学の中に入入れることが出来ないものだらうか。科学を材料にするとこんな大衆的のもの位しか書けないのかしら、それを考へて居るのですが……。¹⁷⁴⁾

ただし、稲村も、労働者層にとっての読みやすさという点では一定の評価を与えており、上述のものと思われる作品公募についても触れている。

稲村 しかし、産報の友達がいつてゐたのですが、吾々は労務者に対して読み物——科学史とか技術の問題を提供して居るのだが、中々喰いついて呉れない。「アニリン」を読んでこれだといつて手を打つた。かういふ形で持ち込んで行けば読んで呉れる。だから新興生産文学を雑誌で募集しようと思つてゐるといふんです。¹⁷⁵⁾

c) 板垣直子「現代文芸と科学技術」

板垣直子は、「とくに戦争により技術の必要が一層切実に感じられ」¹⁷⁶⁾ また「真

172) 座談会「アニリンと微生物を追ふ人々——科学書翻訳の問題——」(『科学日本』7月号, 1942年, 123-139ページ), 137ページ。

173) 同座談会, 125ページ。

174) 同座談会, 137ページ。

175) 同座談会, 126ページ。

176) 板垣直子「現代文芸と科学技術」(『技術評論』11月号 第20巻・第10号, 1943年, 19-22ページ), 19ページ。

に生きた社会を描かうと欲し、また、時代の需要にそふもののかかうとする時には、科学技術の世界をさけることができない」¹⁷⁷⁾にもかかわらず、「科学者の伝記」や「科学者を主人公とした小説」といった分野が「まだ知的題材を支配しきれない日本の作家達に試らみられてゐない」¹⁷⁸⁾といった状況の中で、「生産文学」が持つ意義を次のように述べる。

文芸と科学技術の問題について、最も重要な連関を示すものは、新興生産文学の分野である。科学工業、機械工業の発達した現代に、文芸が生産面を描かうとするのは、最も正しく時代性を選ぶものである。

また、元来新しい諸種の生産面は、日本では文学の中にまだ未開拓地帯として残つてゐることから、作家の野心を刺戟することも起るであらう。¹⁷⁹⁾

このように、「日本にも、これからは、各方面の生産文学が現はれる」¹⁸⁰⁾ことを期待する板垣は、ドイツの「生産文学」へも目を向ける。

かゝる現状のところへ、昨年あたりから、ドイツの新興生産文学が輸入された。私は「アニリン」、「黒い魔術」、「金属」をよんだが、全く異質な印象をうけた。しかも、それが日本の新興生産文学の与へたものと一味共通してゐることも興味深い。¹⁸¹⁾

ただし、板垣は、こうしたドイツの「生産文学」から、従来の文学とはかなり異なる印象を受けている。

これらの作品の技巧を見ると、従来の文学的観念では向ふことができない。作品の底に作者の深い芸術感情が基礎になつてゐるといふやうな作風ではなく、新しい対象について処理してゆく、事務的な、気易な調子が支配している。構成に纏りはあるが、それ故、皮相的で断片的な印象をうけるのである。¹⁸²⁾

我々が「アニリン」や「金属」をよみながらとくに感んずることは、文学

177) 同論考、22ページ。

178) 同論考、21ページ。

179) 同上。

180) 同上。

181) 同上。

182) 同論考、22ページ。

の雰囲気そのものが従来と変つてきてゐることである。といふのは、情意を中心とした生活がそれまでの文学では対象となつてゐたが、新しい生産文学では、知的領域内の活動に焦点が向けられる結果、作品の感情の何となく變つてくることは当然である。¹⁸³⁾

板垣によれば、こうした特徴は「新しい社会的空氣の反映」，「文明の新段階にすすむ時に於ける一種のあはただしさの反応」ではあるが、一定の期間を経れば「しつとりとした普通の文学感覚をもつやうになるかといふに、決してそのやうな断言ができない」¹⁸⁴⁾ものである。しかし、「その背後にある国情や、文化の性質が、作品の質を決定する」という意味で、「さういふものを直ちに日本流に通俗小説と分類してしまふことはでき」ず、むしろ「それはそれとして本格文学の一種」¹⁸⁵⁾とみなすべきである。したがって、板垣は、「科学技術が文学の内容的な要素となること以外に、文学の構築技巧の上にも影響を与へてゐる」¹⁸⁶⁾ことを決して否定的に捉えてはいない。

科学的な統一を保つて整然と構成されるべきことは勿論、文体の如きも飾りのない引締まつた効果をもつことが現代文学の理想とされるてゐる。それも亦、科学時代に於ける人々の好みに合ふ合理的な技巧である。¹⁸⁷⁾

こうして、板垣は、ドイツの「生産文学」に違和感を抱きつつも、時代の移り変わりを反映するものとして受け入れているように思われる。

d) 最上武雄「良き生産文学作品を待望す」

最上武雄は、初めに、最近「技術協会」において「生産文学の振興が叫ばれてゐた」ことに触れ、「これは甚だ適切な事であつて、私も満腔の讃辞を惜しまぬ物である」¹⁸⁸⁾とする。だが、同時に、「独逸の生産文学作品として紹介された、『硝子の驚異』、『レントゲン』、少し様子は異なるが私の『マダムキュリー伝』等を読む機会を得て、「非常に大きな感銘を受けた」一方、「一面若干の失望なしでゐる訳にはいかなかつた」¹⁸⁹⁾という。それぞれの作品において、「その主人公の活躍

183) 同上。

184) 同上。

185) 同上。

186) 同上。

187) 同上。

188) 最上武雄「良き生産文学作品を待望す」(『技術評論』3・4月号 第21巻・第2号、1944年、12ページ)、12ページ。

してゐた時代の科学、技術乃至は社会の状態に就ての歴史的展望は或程度書かれて居り、主人公が如何なる環境の下に、自己の道を歩んだかと言ふ事は良く理解できる」¹⁹⁰⁾ものの、次のような欠点があると指摘するのである。

しかし、科学者の伝記としての要素を持ち、科学が文化の一要素として欠く可からざるに至つてゐる今日の文芸として生きんとする生産文学としては、これ丈けでは平板者のと言はざるを得ないのである。芸術家と同じく科学も自己の科学者としての一生を築き上げる道程に於ては、必ず科学者としての苦悩を経験してゐるのである。この様な科学者の人間的悩みを書かなければ、本当の科学を書いた文学ではあるまいと思ふのである。¹⁹¹⁾

最上によれば、「科学」ないしは「科学的なもの」を文学的に扱う場合には、「科学を歴史的に展望する以外に、人間として、しかも科学内の人間としての科学者が取上げられ」、「科学者としての人間が築き上げられて行つたビルドゥングスローマン的側面が捉へられてゐなければならない」のであり、「これを欠いた所謂生産文芸作品は題材を『科学的分野』に求めた在来の文芸作品の範囲を脱しない」¹⁹²⁾のである。

また、その意味で、「生産文芸を軽蔑してゐる人達」は、「現在の生産文学作品の本質的弱点を見破つてゐる人達である」¹⁹³⁾とも言える。しかし、そうした人たちは、「科学を物質的視し、科学者を性能の良い器械の如くに考へ、科学が人間文化の一翼たる事に気が付かないか、又は、科学に於て人間が重要な要素である事に認識を致さぬ人達」¹⁹⁴⁾でもある。つまり、「現在世に行はれてゐる生産文学作品」には、「かかる誤解を解き、科学畑以外の人達の科学への真の理解を深める要素に於いて欠けてゐる」¹⁹⁵⁾ということである。

まさにその意味で、最上は「立派な生産文学を待望する」¹⁹⁶⁾のである。

e) 日本文学報国会編（尾崎士朗・丹羽文雄・日野葦平外筆）『増産必勝魂』

本書は、兵器工場や製鉄所、造船所、化学工業、炭鉱など、軍需生産に携わる

189) 同上。

190) 同上。

191) 同上。

192) 同上。

193) 同上。

194) 同上。

195) 同上。

196) 同上。

国内の33の企業の現状に関する陸海軍の報道班員らの報告を纏めたものだが、巻末に、付録として、「増産の核心を衝く座談会」が収録されている。この座談会は、アメリカが豊富な資源物資に基づく「天文学的数字の生産をもって対日威嚇謀略を行つて」いる状況下で、「帝国の作戦遂行に必要な戦争資材の生産増強こそ大東亜戦争の勝敗の鍵を握る」との認識の下に、読売新聞が実施した「生産戦場躍進運動」¹⁹⁷⁾の一環として開催されたものである。参加者は、日本文学報国会、陸海軍、放送局、読売新聞の代表者6名のほか、尾崎士朗、丹羽文雄といった作家6名である。

日本文学報国会の戸川貞雄によれば、同会では、この年から「生産文学」に関連する文学賞を設けることが検討されていた。

文学報国会では今年度から生産戦場躍進運動と関連して皇国生産文学賞を創設して生産場面に材料を取つた小説、また小説ばかりでなく生産文学を奨励するために努力した者に対して努力賞を出して生産文学を促進すると言う案が出来て居ります。¹⁹⁸⁾

戸川によれば、戦争文学として見たとき、丹羽文雄の『海戦』が文学者の目で、火野葦平の『麦と兵隊』が兵隊の目で描かれているように、生産文学も、文学者が「銃後の生産戦場に從軍してこれを描く」ものと、「工具として現在働いている者の中から」生まれてくるものに分けられるが、「この両方の面から生産文学が創造されることがこの座談会が単行本になつて出版される一つの大きな意義」¹⁹⁹⁾である。これを受けて、「生産文学」について意見を求められた丹羽は、『アニリン』を例にあげて、次のようにドイツの「生産文学」と日本のそれとの違いを口にする。

日本に^{ママ}むらはれたる生産文学と、外国殊にドイツあたりでいつてゐる生産文学とはちがふですね。たとへば、ドイツの生産文学だと出版文化協会あたりでいつてゐる「アニリン」などは、生産過程とか、発展過程とかつまり非常に科学的なもので、いままであんなものを小説に使つたものはない。甚だ専門的なものです。いかにもそれは生産と云ふ感じです。しかしそれを扱つてゐる人間とか登場する人物は、むかしの文学的觀念から一步を出てない。ただ「アニリン」をそういふむかしからありきたりの人間がやつてゐるので

197) 日本文学報国会編（尾崎士朗・丹羽文雄・日野葦平外筆）『増産必勝魂』文松堂書店、1943年、271ページ。

198) 同書、300ページ。

199) 同書、301ページ。

す。ところが日本の現在もとめてゐる生産文学は、それとちがふ。別に造船を発見された訳ぢあなし、造船といふものはむかしからあるでせう。そこに働いてゐる人間に新しい生産人としての息吹きを持たすといふのが、日本の生産文学の中心で、外国とちがつてゐるところです。²⁰⁰⁾

このように、丹羽が想定する日本の「生産文学」は、ドイツのそのように科学的な発明や発見が描かれるというよりは、むしろ生産に携わる人物の意気込みのようなものが描かれるものである。そして、そこには、実際に職場で働いている人々には小説を書く余裕はないため、彼等の気持ちや信念、あるいは彼等が無意識に考えていることを表現して、彼等に納得させるのが「私達小説家の任務」²⁰¹⁾であるとの考えがあった。

ただし、関連して日本の「生産文学」について付言するなら、こうした丹羽の考えとは逆に、「生産文学」は実際に生産に従事している人々の間から生じるべきだという考えも見られた。例えば、先にあげた日比野士朗はその一人であり、「生産文学」は「一般の作家が書くやうな作品」²⁰²⁾ではなく、まさに生産に従事する「産業戦士」が書くべきものだという。

私は改めて、産業人は産業人の目を持つべきことを強調したい。さうでなければ、私の言ふ真の「生産文学」は生れて来ないだらう。戦場を活写した文学は兵士の手からでなければ生れなかつたやうに、産業人の生活を真に描くことの出来る者は、やつぱり産業戦士しかいない。²⁰³⁾

f) 小池藤五郎編著『皇国生産魂』

そして、当時の日本においては、こうした日比野の考え方のほうがむしろ主流であつたように思われる。そのことは、例えば、小池藤五郎編著『皇国生産魂』からも窺われる。本書はまさに工員の手になる「生産文学」の作品集であるが、末尾に置かれた「生産青年の教育と生産文学」において、小池は、「生産文学の性格」²⁰⁴⁾について次のように述べている。

生産文学は、先ず生産者の手記から出発しなくてはならない。作家は生産

200) 同書、301-302ページ。

201) 同書、302ページ。

202) 日比野士朗、前掲書、50ページ。

203) 同上。

204) 小池藤五郎編著『皇国生産魂』山海堂、1944年、345ページ。

の現場に自身を投じた上で、そこから創作すべきである。殊に将来の生産文学の作家は、生産者の中から育成すべきである。²⁰⁵⁾

以上のように、「生産文学」は、その必要性はおおむね認められていたものの、文学的な質の面で不十分と見られていたようである。また、「生産文学」のあり方については見解の相違も見られ、その創作者についても、科学者か作家か、作家か従業者かといった点で異なる意見が見られた。

6.3. 「科学技術文芸作品」の公募の顛末

ついでながら、ここで、上記の「科学技術文芸作品」の公募について、詳細を確認しておきたい。改造社の雑誌『文芸』の1943年10月号に掲載された広告によれば、公募の正式なタイトルは「『科学技術文芸』作品募集」であり、詳細は次のようなものであった。

まず、募集の趣旨については、次のように述べられている。

戦局は瞭らかに最も苛烈な生産戦の段階に突入した。生産戦は即ち科学技術戦である。あらゆる方途を講じて科学技術の国民各層への急速なる滲透を図らねばならぬことは言ふ迄もない。就中、文芸の卓越せる啓蒙普及力を最大限に發揮せねばならぬのは、今日をおいてはないであらう。

今般本社が日本技術協会と協力して、科学技術の啓蒙、科学技術精神の昂揚に資する作品を広く江湖に求め、之に科学技術文芸賞を以て酬いんとするもの、蓋しここに鑑るところあるに他ならない。

この前例なき新しい試みが、我国の科学技術の振興に寄与し、併せて国民の創造的空想力を刺戟培養し、且又、文学界に一脈清新の風を齎すならば、我々の欣懷これに過ぐるものはない。²⁰⁶⁾

審査委員としては、有馬頼寧、和田小六、高野六郎、岸田日出刀、林巖、木下杢太郎、瀧井孝作、大佛次郎、岩田豊雄、高橋健二の10名があがっている。²⁰⁷⁾ 作品については、「小説 戯曲」とあるが、「伝記、報告、解説、記録等の形式にても可」²⁰⁸⁾とされている。また、この点については、「改造十月号座談会を参照されたい」²⁰⁹⁾と、上記の「科学技術と文学」に関する座談会の記事を参照するよう指

205) 同上。

206) 「科学技術文芸」作品募集（『文芸』（十月号 第十一巻第十号、1943年、4ページ）、4ページ。

207) 同上。

208) 同上。

示されている。原稿枚数は「四百字詰百枚——百五十枚」、締切は「昭和十九年一月三十一日」で、原稿の送付先は「『改造』編集部」であり、「入選作品の著作権は改造社に属する」²¹⁰⁾ こととなっている。発表は「昭和十九年改造四月号誌上」、賞金は「入選一篇 二千元 佳作二篇 各五百円（賞金は何れも国債）」²¹¹⁾ である。同じ広告は、雑誌『改造』では1943年の十月号（第二十五卷第十号）、十一月号（第二十五卷第十一号）と、1944年の一月号（第二十六卷第一号）にも掲載されている。²¹²⁾

しかし、ではどのような作品が応募され、また受賞したのかということ、その点は不明である。というのも、予告された受賞作の発表がなされないまま、雑誌『改造』は、1944年年六月号（第二十六卷六号）をもって発行中止となったからである。²¹³⁾ おそらくは時局のさらなる悪化のため、あるいは期待する作品の応募がなかったためであろう。

ちなみに、1968年に刊行された『日本科学技術史大系 第6巻・思想』では、この作品公募に関連して、第8章「戦争と科学技術」において、次のように述べられている。

昭和初頭にはマルクス主義文学運動の活発化により、社会認識の問題により多く関心を集めていた日本の文学も、運動の弾圧後は社会問題への「科学的な」論点を失い、むしろ自然科学との接触を深める方向をたどった。作家たちが、即物的に生産技術の場を題材としはじめ、技術と文学との関係という形に、労働者文学の問題意識をあらためて転位させたことも指摘される（資料8-12）。しかしその裏には、軍需生産の拡充をめざす国家政策への順応がみられ、たとえば取ってつけたように「科学技術文芸作品」とまで呼んでみても、それは労働力の涸渇した決戦下の国民意識を、軍需工場へふりむけようとする文化統制策に加担するだけであって、文学と科学技術との内在的な関連性に実質的な変化が起こったとはいえない。²¹⁴⁾

結局のところ、こうした「科学技術文芸作品」の創作の奨励も科学と文学の政

209) 同上。

210) 同上。

211) 同上。

212) 関忠果・小林英三郎・松浦總三・大悟法進編著『雑誌「改造」の四十年』光和堂、1977年、566-567ページ参照。

213) 同書、568-569ページ参照。

214) 日本科学史学会『日本科学技術史大系 第6巻・思想』第一法規出版株式会社、1968年、399ページ。

治的・軍事的利用の一事例であるが、それをマルクス主義的な労働者文学の国策文学への転位と見ることができるとすれば、そこにはナチス体制下での経営社会政策の変質との類似性が感じられよう。また、その意味で、藤田の言う「ナチス文学としての生産文学」の翻訳紹介もまた国策への加担であったわけである。

7. 『硝子の驚異』とナチズム

これまで見てきたように、『硝子の驚異』は、ドイツにおいて経営社会政策的な観点から評価されたアッペを描いた作品であるが、大東亜戦争中、経営社会学がナチス的に変質した形で受容された日本において、戦争遂行のために軍需生産の増強を図ることを目的とした科学技術文学の振興という観点から、ナチス的な文学として受容された。

では、そもそもシェッフェルの『硝子の驚異』にはナチズムの影響が見られるのだろうか。このことを考える上では、2つの難しさがある。一つは、そもそも1905年に没したアッペはワイマル共和国時代以後のナチスやその支持者としては描かれ得ないということであり、もう一つは、他方で、ワイマル共和国時代の経営社会学的な意味での経済社会政策とナチス時代のそれとの間に一定の連続性が窺われることである。したがって、問題は、作品の内容がどの程度ナチズムと関連づけられ得るのかということになろう。この点について、以下、公益の優先、戦争肯定、および「社会主義」の解釈という3つの点から考察したい。

7.1. 公益の優先

第一は、榎田が指摘する「公益は私益に先立つ」という民族共同体的な理念や、「より大なるもの、より高きものへの奉仕」に合致する内容である。作品の中でこの点に関連する箇所を拾い上げてみると、次のようなものがあげられる。

まずは、巻頭のモットーである。

誰もが、自分でいながら自分の身体ではない。(S. 7: 2ページ)²¹⁵⁾

次に、社会民主主義の国会議員との対話の中でのアッペの言葉があげられる。

「〔前略〕個人の権利は、共同体の権利の前に沈黙せねばならないのです。」

215) Fritz Scheffel: A. a. O., S. 7. 以下、本書からの引用は、引用直後にページ数のみ記す。また、併せて藤田訳のページ数も記す。なお、翻訳にあたっては、藤田訳を参考にした。

(S. 243 : 318ページ)

「〔前略〕貪欲な私益の法外な利得は、公益権に取って代わられねばなりません。」(S. 243 : 319ページ)

「自分の身でいながら、実はまったく自分ではないことに気がつく時間があるものです。そんなときには、高次の要求に押されて、その執行者になりきってしまいます。」(S. 244 : 319ページ)

また、ローデリヒ・ツァイスに退職を迫る場面で、ローデリヒが拒否して辞去した後、退職と代償に関する草稿を書きながら、アッペは次のように考える。

「私有財産の権利は、公益の権利によって粉碎されねばならない。共同体の権利は、個人の権利よりも優先されるのだ。」(S. 266 : 350ページ)

ロオテ枢密顧問官と大公の対話の中では、ロオテが、アッペの考えにつて次のように述べている。

「市民的自由のあらゆる制限に対するアッペの無条件の戦い、そこから導かれる、個人が全体のために服さねばならぬ義務、それらがアッペの背後に丸となった従業員団を創りあげたのです。」(S. 274 : 360ページ)

ライプツィヒ大学の法律学教授ゾームとともに財団の定款の草案を検討する際のアッペの言葉は、次のようなものである。

「〔前略〕この財団から資本主義的な性格を取り去り、上位にある共同体に対する奉仕という光をあてます。」(S. 280 : 368ページ)

これについて、語り手は次のようにコメントしている。

これはおよそ非資本主義的な主張だが、個人主義的な利得欲や余剰価値の権勢を打破し、非個人主義的な上位価値を重んじてやまぬアッペの努力を証明するものである。(S. 282 : 371ページ)

誰もが、アッペの信任を受ければ工場に結びつき、己を滅して全体に投ず

るという容易ならぬ試煉の前に立った。反社会的な人物は、吹きこぼれる不潔物のように突きのけられた。定款の背後にひそむこの最良の教育者の意志は、根なし草の個人主義者を作るのではなく、個人を成熟させて、優越的に、自発的に共同体の拘束に身を投じさせようとした。それに対しては、最末席に列なる者さえ責任を感じるように。(S. 283 : 372ページ)

また、この場面では、草案検討後のアッベの述懐についても次のように述べられる。

「〔前略〕私欲を減して公共心を養い——うわべの功名心を減して人間の仕事の内面的価値を理解し——服従を排して自覚をもって自由に義務を遂行するのだ……。」(S. 283 : 373ページ)

これについて、語り手は次のように言う。

彼〔＝アッベ（引用者注）〕は指導者から何を要求したか。「大産業における指導的職能の実践にあたっては、自己の利益と個人の利害を第一と考えてはいけない。国家という共同体の社会的利害を第一に顧みねばならない。」(S. 284 : 373ページ)

最後に、枢密顧問官ヴェーレンプフェニヒとの対話で、アッベは次のように言う。

「〔前略〕労働者と同様企業家も、ある一定の点をすぎると、もう自分でいながら自分の身体ではなく、上位の共同体に順応してゆかねばなりません。」(S. 290 : 381ページ)

このように、本作品では、己を捨てて「公益権」、「共同体の権利」を優先し、「上位にある共同体」や「上位価値」、「全体」、「国家」に尽くすことが繰り返し説かれている。こうした考え方は、自らの持分のほとんどを財団に譲渡するといったアッベ自身の自己犠牲的な態度や企業家の社会的責任の反映とみなすこともできる。また、アッベが活躍した時代がドイツが国全体として「科学大国」を目指していた時期でもあり、例えばアッベとショットの硝子研究所が「国家的事業」でもあったことも考慮されねばなるまい。²¹⁶⁾しかし、他方で、それが、ナチスの

216) 宮下晋吉『模倣から「科学大国」へ』世界思想社、2008年、293ページ。

「25カ条綱領」にも明記されているほどナチズムにとって重要な「公益は私益に優先する」(Gemeinnutz geht vor Eigennuz) という考え方——それは同時に自己犠牲を伴う——と一致することは、否定できないであろう。²¹⁷⁾ そのことが、著者シェッフェルの意図したことかどうかはわからないが、少なくともこの意味で、本作品がナチズムに関連づけて受容される余地がないとは言えないと思われる。この点では、ハンス＝ヴェルナー・ニーマンの次のような指摘も参考になろう。

だが、シェッフェルの本には、個々の点では、20年代と30年代の思想、決まり文句、イデオロギー的構成要素が「蓄積」されている。例えば、彼が、アッベに、国際的な資本主義を、ワイマール共和国時代の右翼の政党の、とりわけナチスの語彙を思い出させる言葉で罵らせるときに。小説の中で、アッベは言う。「どこか上のほうに受益者の階層がおり、世界はその人々に貢物をしなければならないのだ。」(S. 240) このように、アッベは、多くの点で、シェッフェルによって、ナチスの経済イデオロギーの先取りされた実例として理解され、自分自身の利益を常に全体の利益の犠牲とする用意があり、「国民の力をないがしろに」(S. 109) しない企業家の原型として評価されている。²¹⁸⁾

このようなニーマンの見解については、ゼバスティアン・グレープ＝ケネカーも、「完全に同意されねばならない」²¹⁹⁾ とみなしている。

7.2. 光学兵器の生産についての硝子の重要性

第二は、日本での受容でも見られた光学兵器の生産についての重要性である。作品では、硝子工場創設のための国家援助を乞うために1882年に提出した建白書に関連して、ラーテノウ (Rathenow) の商業顧問官エーミール・ブッシュとピヒト商会の鑑定書が、光学硝子の「情けない外国依存」(S. 220: 288ページ) を強調している。また、1884年3月にこの件が国会で審議された際には、高名な医師で細胞学者のヴィルヒョウがこの案件のために尽力し、「堂々たる熱弁をふるって

217) ナチズムにおける公益の優先や自己犠牲については、次の文献を参照。「25カ条綱領」(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』<https://ja.wikipedia.org/wiki/25%E3%82%AB%E6%9D%A1%E7%B6%B1%E9%A0%98> 最終閲覧日は2025年5月17日)；エーリク・ヴォルフ「ナチス国家の正当な法」鈴木敬夫訳(『専修総合科学研究』第26巻, 2018年, 101-126ページ), 107, 109-113ページ；柳澤治「ナチス期ドイツにおける資本主義の組織化」(『西洋史学』第239巻, 2010年, 1-21ページ), 7ページ。

218) Hans-Werner Niemann: A. a. O., S. 291.

219) Sebastian Graeb-Könneker: *Autochthone Modernität. Eine Untersuchung der vom Nationalsozialismus geförderten Literatur*. Westdeutscher Verlag, Opladen 1996, S. 238.

議員の賛成を求めた」(S. 221 : 289ページ) のであった。

「これは実に国民的事業であります。……この案件は陸海の軍事に供する器械の製造上特に重要性を有するのでありますが、我国はこの点從來まったく外国に依存しておりました。……少なくとも、学会が固唾を呑んでこの案件の成行を見守っており、ここで支出される金額はこの硝子に依拠する全産業にとって疑いなくきわめて有益なのだということだけは申し上げられます。」(S. 221f. : 289ページ)

こうして1884年9月1日に操業を開始した硝子工場からは、兵器としても利用される硝子が製造されるが、丁度この場面で、タイトルの「硝子の驚異」という言葉が作品中ただ一度だけ用いられていることは、興味深い。

こうしてツァイス工場は、硝子工場と緊密に結びついて、戦時にも平時にも用いられ、地上における人間の生活をより美しく、厳かで、安定したものとする硝子の驚異を溢れるばかりに発明し、製作したのであった。(S. 229 : 300ページ)

ところで、戦時にも用いられる硝子の製造については、定款の作成の際に助言を受けた法学者ゾームから疑問が出されている。

「平和的な事業とおっしゃいましたね。でも先生は、並外れたお骨折りをなさって、軍に最良の光学器械を納めていらっしゃいます。これはどう考えたらよいのでしょうか？ あれもやはり平和的な事業でしょうか？」(S. 281 : 369ページ)

これに対するアッペの答えは次のようなものである。

「硝子の武器ですよ。」とアッペは答えた。「私たちが他国の軍隊に対するドイツの軍隊の優位を大きくすればするほど、平和にも貢献するわけです。」(S. 281 : 369ページ)

このように武器によって平和を保つという考え方は、上記のように、本作品の日本での受容でも見られたものである。ただし、それはあくまでもシェッフェルが言わせていることであり、アッペ自身がどのように考えていたのかはわからな

い。だが、こうしたくんだりから少なくとも、著者シェップフェルは科学的発明の兵器への転用に疑いを持っておらず、アッペをそのような人物として描いていることは確認できる。と同時に、このことは、アッペの死後の工場の描写にも当てはまる。例えば、第一次世界大戦中、工場は兵器の生産に従事する。

大戦の直前には5300名の者が工場で働いていた。1914年、その数は急激に高まり、戦時の必要に応じて増大した。工場は兵器工場となり、陸に水に、あるいは空に戦うあらゆる者たちの視力を先鋭化した。1917年には9400名の労働者が、重要な工場を中心にイエナの真只中を貫く銃後の戦線に就いていた。(S. 325 : 429-430ページ)

そして、作品が刊行されたナチス時代の様子も次のように描かれており、工場が再軍備に貢献していることがわかる。

工場はまたもや武器工場となった。科学と経済と軍とが工場に注文を発し、その血のめぐりを速め、幾千もの手と頭脳を動かしているのだ。(S. 329 : 434ページ)

このように、本作品は、光学硝子が単なる防衛のためだけでなく、実際に戦争に用いられることに対しても肯定的であり、同時代のナチスによる再軍備に対しても協力的である。その意味で、ここでは、アッペとツァイス工場は、「大砲王」とも呼ばれたアルフレート・クルップ (Alfred Krupp, 1812-1887) ほどではないとしても、²²⁰⁾ 兵器の製造に尽力する工業家に近づけられているのである。

7.3. 「社会主義」の解釈

第三は、「社会主義」の解釈である。関連する箇所をあげながら検討してみたい。なお、以下の引用において、〔 〕内に記した「国民社会主義者」と「国民社会主義」は藤田訳である。

まず、社会民主党の国会議員との対話の中で、アッペは自らを二度「社会主義者」(Sozialist)と呼んでいる。

「しかし、ツァイス老が亡くなられた直後にあなたが恩給規程を導入された折、ツァイスの若先生はあなたと歩調を合わせたではありませんか。」

220) アルフレート・クルップについては、浅井治海、前掲書、71-72ページを参照。

「もちろんです、それについては私は彼を高く評価しています。ですが、実のところ難儀をしました。社会的な活動をしようと思うなら、社会主義者〔国民社会主義者〕でなければならないのです。生まれつきかもしれません。それはいわば倫理上の根本態度のようなもので、そのとりこになった人間の活動範囲にあるものは、すべてそれによって形作られるのです。これは社会民主主義ともマルクス主義ともこれっぽっちも関係ありません。」(S. 242 : 317 ページ)

「いつかは相続者たちが怠惰と安逸とに流れる日がやって来ます。そうなるとこの連中は退き、株式会社が生まれます。その株が取引所で売買され、どうのこうのということになるのです。よその者たちがすることは、私には変えようがありませんが、ツァイス工場は道を誤ってはなりません。マルクス主義者ではないとしても、私は社会主義者〔国民社会主義者〕です。個人の権利が共同体の権利の前に沈黙することが必要な事柄というものがあるので。」(S. 243 : 318 ページ)

また、アッペは、ローデリヒ・ツァイスとの対談の中で、父親のカール・ツァイスを、自らと同じ意味で「社会主義者」(Sozialist)とみなしている。

「もし幸い私が留任できることになれば、私は全財産を財団にして、私の生きている間は自らそれを拡充し、指導するつもりです。あなたが身を引いて、代償金を受け取ってくだされば、その道が開けるのです。それは父上の思召しにも適うことと存じます。なぜなら、あなたの御遺産の価値は保たれますし、工場は発展して、私は来る日も来る日も父上に対する責任を果たすことができるからです。父上はそのお人柄の根本において、常に立派な社会主義者〔国民社会主義者〕でした。」(S. 264f. : 347-348 ページ)

そして、作品の結びでは、語り手は次のようにアッペの「社会主義」(Sozialismus)について語る。

工場も、イエナの町も、大学も、アッペの社会主義〔国民社会主義〕の証人だ。一人の男が、富を捨て己を捨てて、己の持つあらゆるものを犠牲にして、他人が堂々たる生活を営めるようにしたのである。(S. 329 : 434 ページ)

〔 〕内に示したように、これら4つの箇所について、藤田はすべて「国民社会

主義者」または「国民社会主義」という訳語を充てている。また、このほかに、最初の引用に続くアッベの次の言葉の中でも、「社会的」(sozial)という訳でよいところを、「国民社会主義」としている。

円満を旨とする社会的〔国民社会主義〕タイプの人間は、資本主義のタイプと対立します。後者はしばしば勤勉な努力家ですが、全力を傾けて財産の増大に努め、それを現行法の枠内で非の打ちどころなくやってのけるのです。(S. 242 : 317ページ)

すでに触れたように、同時代の日本の匿名の書評において、アッベが「国家社会主義者」とみなされたのは、藤田訳の影響によるものだと思われるが、言うまでもなく、アッベの生没年を考慮すれば、彼をナチスとみなすことはアナクロニズムである。しかし、他方で、上の引用にもあるように、アッベの態度が社会民主主義ともマルクス主義とも異なるものだとされていることや、すでに見た「公益」の優先と戦争肯定的な側面、および作品が刊行された時代といったものを考慮すれば、本作品においてアッベの「社会主義」がナチス的なニュアンスを帯びていると解釈する余地がないとは言えないように思われる。そして、そのことは、作品中で、シェッフェルがアッベに「第三の道」という表現を使わせていることによって助長されているように思われる。アッベは、社会民主党の国会議員との対話において、次のように述べている。

「〔前略〕つまり、資本主義でもなければ、マルクス主義でもありません。おそらく国民を束ねて一つにし、分裂させない第三の道 (einen dritten Weg) があるのです。」(傍点部分は原文では隔字体で強調されている) (S. 241 : 315ページ)

「ではお互いに政治と宣伝のスローガンは一切やめましょう。きっぱりと申し上げます。私は、マルクス主義的・社会主義的な未来の国家と同様に、純資本主義を拒否します。第三の道 (einen dritten Weg) が必ずあるに違いなく、私はそれを見出すでしょう。」(S. 245 : 321ページ)

また、定款作成の終わり頃、列車の中での思索でも、次のように考える。

「〔前略〕工場から労働と賃金とを与えられるすべての者が、資本と労働の間の格闘から解き放たれ、第三の道 (den dritten Weg) を歩むようになる。土

地、資本、労働という従来の経済の三つの礎石を、工場共同体という四つ目の礎石が覆うのだ。」(S. 297 : 390ページ)

確かに、経営社会学的な観点から見たとき、アッペの経営社会政策は、資本主義とも既存の社会主義とも異なるものであり、その意味で、これらの「第三の道」という言葉は、単にそれを表現したものと取ることもできる。しかし、他方で、上に見たような本作品の特徴を考慮すれば、「第三の」という言葉に「第三帝国」の暗示を見ることも、まったく不可能とは言えないように思われる。この点、最初の引用において、原文で「第三の」の部分が隔字体で強調されていることから、単なる順序を超えた特別な意味が与えられているように感じられるのである。そのように見れば、アッペの「社会主義」を「国民社会主義」ないし「国家社会主義」と解釈することは、必ずしも間違いだとは言えないと思われる。

このように、本作品における「社会主義」という言葉にナチス的な解釈の余地があることは否めない。その意味で、すでに見たように、本作品をナチス革命の洗礼を受けた作家の手になる「生産文学」として紹介する藤田のような人物にとっては、ナチズムと関連づける解釈こそ相応しいものだったのであろう。そしてまた、こうした解釈をするならば、アッペのイメージはナチス時代の国家主義的な経営者であり指導者となり得るのである。

おわりに

最後に、本稿での議論をまとめると、次のようになる。エルンスト・アッペは、ツァイス財団を設立するなどの経営社会政策を実施し、1920年代から1930年代初頭に成立した経営社会学において先駆的な経営者とみなされた。しかし、経営社会学はナチス時代に国家主義的なものへと変質し、それが大東亜戦争中の日本で軍需生産増強の一助として受容された。そして、まさにその当時、日本では同じく軍需生産増強の一環として「科学技術文芸作品」の執筆が推奨されており、その中で、シェップフェルの『硝子の驚異』が模範となるべきナチス的な「生産文学」として受容され、アッペは「国民〔国家〕社会主義者」とみなされた。こうして、アッペ像は、経営社会学の変質と日本での受容を経て、経営社会政策の先駆者からナチズムの意味での企業家・指導者へと変貌を遂げたのであった。そしてまた、そこから改めて原作を振り返れば、本作品が、とりわけ公益の優先や科学技術の軍事利用に対する肯定的立場において、ナチズムに関連づけて解釈される余地を持つことは否定できないのである。

もちろん、例えば『アニリン』、『取り憑かれた人々』、『大西洋造船所』などの同時代の小説とは異なり、ヴェルサイユ条約への敵意や兵器の製造そのものが描

かれているわけではない。²²¹⁾ だが、このように見れば、おおむね1900年代後半を舞台とする本小説にも、そうした傾向が及んでいることがわかる。そして何よりも、ドイツにおける経営社会学の成立とナチス時代におけるその変質が、軍需生産増強という観点において、日本における「科学技術文芸作品」振興の機運と通底していることは、この時代のドイツと日本の文学を考える上で重要な視点と言えよう。また、経営社会学のナチス的な変質についても、アルンホルトのような人物の存在を考慮したとき、両者の間にもともと通底するものがあったのではないかということを、改めて考えさせられる。だが、こうした点についての詳しい考察は、今後の課題としたい。

221) これらの作品については、次の拙論を参照。「ナチス時代の科学小説における科学技術の濫用について——K.A. シェンツィンガーの『アニリン』を例として」(『ドイツ文学』第164号, 2022年, 41-57ページ); 「ヴルフ・プライの『取り憑かれた人々』について——ナチス時代の工業小説」(『かいろす』第62号, 2024年, 1-37ページ); 「ヘルムート・M・ベトヒャーの『大西洋造船所をめぐる』について——兵器開発の文学」(『VERBA』第48号, 2025年, 44-64ページ)。

Von der betrieblichen Sozialpolitik zum Nationalsozialismus

—F. Scheffels „*Gläserne Wunder*“ und E. Abbe—

Ken-ichi TAKEOKA

In dieser Abhandlung, die sich mit der Untersuchung der populärwissenschaftlichen Schriften in Deutschland während der Zeit des Nationalsozialismus beschäftigt, wird Fritz Scheffels „*Gläserne Wunder*“ (1938) behandelt. Es wird versucht deutlich zu machen, dass der Protagonist Ernst Abbe in der Rezeption in Japan im gleichen Zeitalter als nationalsozialistischer Unternehmer und Führer gesehen wurde.

Die Betriebssoziologie entstand in Deutschland in den 1920er Jahren. Dabei wurde Ernst Abbe, der 1889 die Carl-Zeiß-Stiftung gründete, als Vorläufer der betrieblichen Sozialpolitik angesehen. Aber die betriebliche Sozialpolitik hatte seit der Machtergreifung der NSDAP eine stark nationalistische Tendenz. Gerade in dieser Zeit erschien Scheffels „*Gläserne Wunder*“.

Nun wurde in Japan in den 1930er und 1940er Jahren die nationalistisch veränderte betriebliche Sozialpolitik von Deutschland als ein Mittel für die Ankurbelung der Produktion von Kriegsmaterial im Zweiten Weltkrieg eingeführt. In diesem Rahmen wurde auch in Japan das Verfassen von Literatur, die technologische Themen behandelt, empfohlen. Dabei wurde die populärwissenschaftliche Literatur aus Deutschland, wie Scheffels „*Gläserne Wunder*“, als gutes nationalsozialistisches Vorbild aufgenommen. Dort wurde Abbe als nationalsozialistischer Unternehmer und Führer vorgestellt. Das erscheint deutlich darin, dass das Wort ‚Sozialismus‘ in der japanischen Ausgabe als ‚Nationalsozialismus‘ übersetzt wird. So verwandelte sich das Bild von Abbe durch die Entartung der betrieblichen Sozialpolitik und die Rezeption in Japan vom Vorläufer der betrieblichen Sozialpolitik in den Unternehmer und Führer im Sinne des Nationalsozialismus.

Von diesem Standpunkt gesehen könnte man auch nicht leugnen, dass dieses Werk als nationalsozialistische Literatur interpretiert werden kann. Es betont also den Vorzug des Gemeinnutzes, der im Programm der NSDAP für besonders wichtig gehalten wird, und bejaht offen die militärische Benutzung der Technologie.